山梨県北巨摩郡白州町

板　橋　遺　跡

工場増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

白州町教育委員会

山梨県北巨摩郡白州町

板　橋　遺　跡

工場増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

白州町教育委員会

序

この報告書は、白州町下教来石地内に所在する熊本県果実農業協同組合連合会白州工場の増設工事に伴い、発掘調査された板橋遺跡の調査結果をまとめたものであります。

白州町には、縄文時代から古代・中世までの各時代にわたり、人々の生活の跡を語る埋蔵文化財が数多く分布し、各遺跡からは、それぞれの時代の土器・石器等が発見されています。特に、白須・台ケ原・横手・鳥原・教来石地区の広い段丘面には、大規模な遺跡が立地しています。本遺跡も釜無川右岸の段丘上に位置し、約15,000㎡の広がりをもつ、縄文時代前期を主体とした遺跡であります。

今回の調査は、工場増設工事にかかる遺跡の北側、約1,000㎡の範囲についてのみ実施されましたが、その結果、縄文時代の住居跡3軒、土壙10基等の遺構が検出されました。特に住居跡は、その出土土器から縄文時代早期末から前期初頭にかかる、過渡期の集落跡であることが判明しました。

以上のように、今回の調査は板橋遺跡の全体から見ますと小範囲にすぎませんが、県内にあまり発掘例のない、縄文時代早期末から前期初頭にかけての集落跡の調査結果は、白州町の歴史を知るばかりでなく、山梨県の歴史を解明する上にも、貴重な資料になるものと考えております。本報告書が、縄文時代の集落研究の一資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いです。

最後に、本発掘調査の報告書の発刊にあたり、山梨県教育庁文化課の皆様をはじめ、調査の主旨を御理解され、多大なご協力をいただきました熊本県果実農業協同組合連合会の皆様方並びに、厳冬期にもかかわらず直接調査に従事していただきました下教来石区の方々に衷心より御礼を申し上げ、この報告書の序といたします。

平成元年12月

白州町教育委員会

教育長　道村初夫

例　　言

1．本書は、熊本県果実農業協同組合連合会白州工場の増設工事に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡白州町に所在する板橋遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は、熊本県果実農業協同組合連合会と白州町とが費用分担し、白州町教育委員会が実施した。

3．発掘調査及び出土品の整理は、白州町教育委員会で行った。

4．遺構・遺物の実測・トレース及び写真撮影は折井が行った。

5．本文執筆及び編集は折井が行った。

6．発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏にご教示いただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

　新津健・坂本美夫・保坂康夫・平野修・小林公明・五味一郎

7．本調査の出土品・諸記録・図面・写真等は、白州町教育委員会が保管している。

8．本調査にあたり、山梨県教育庁文化課の適切な御指導をはじめ、熊本県果実農業協同組合連合会及び地元下教来石区の皆様に御理解・御協力をいただいた。心から謝意を表する次第である。

調　査　組　織

調査主体　白州町教育委員会（教育長　道村初夫）

事務局　宮沢元一（課長　～３月31日）・有賀祥司（課長　４月１日～）
山口光茂（係長　～３月31日）・山本賢二（係長　４月１日～）
名取利之（～３月31日）・伊藤早苗・植松良治・山田健二・
古屋明美・折井　敦（調査担当）

調査参加者　松野重雄・小林竹義・小林弥四郎・名取勉・小林よしみ・
加久保辛・小林茂子・小林正代・小林あや子・牛山みつる

目　　次

序
例言・調査組織
目次
挿図目次・図版目次

Ⅰ　調査状況　1
　1．調査に至る経過　1
　2．調査経過　1

Ⅱ　位置と環境　4
　1．自然環境　4
　2．歴史的環境　4

Ⅲ　遺構と遺物　6

Ⅳ　考察　27
　1．住居跡　27
　2．土器　27

参考文献　30

図版集

挿　図　目　次

第１図	遺跡位置図	2
第２図	調査位置図	3
第３図	板橋遺跡と周辺遺跡	5
第４図	遺構配置図	7・8
第５図	第１号住居跡とピット３	9
第６図	第１号住居跡出土石器	9
第７図	第１号住居跡出土石器	１０
第８図	第１号住居跡出土石器	１１
第９図	第１号住居跡出土土器	１２
第10図	第１号住居跡出土土器	１３
第11図	第２号住居跡	１４
第12図	第２号住居跡出土石器	１５
第13図	第２号住居跡出土石器	１５
第14図	第２号住居跡出土土器	１６
第15図	第３号住居跡	１８
第16図	第３号住居跡出土石器	１８
第17図	第３号住居跡出土石器	１９
第18図	第３号住居跡出土石器	２０
第19図	第３号住居跡出土土器	２１
第20図	第３号住居跡出土土器	２２
第21図	ピット４	２２
第22図	ピット４出土石器	２３
第23図	ピット４出土土器	２３
第24図	ピット４出土土器	２３
第25図	ピット２	２４
第26図	ピット５～８	２４
第27図	ピット１	２４
第28図	ピット９・10	２４
第29図	第１号配石	２５
第30図	グリッド出土石器	２５
第31図	グリッド出土土器	２６

図　版　目　次

図版１　上　調査区全景　下　第１号住居跡

図版２　上　第２号住居跡　下　第３号住居跡

図版３　上　ピット１　下　ピット２

図版４　上　ピット４　下　ピット５～８

図版５　上　ピット９　下　１号配石

図版６　第１～３号住居跡出土石器

図版７　第１号住居跡出土土器

図版８　第１号住居跡出土土器

図版９　第３号住居跡出土土器

図版10　上　第２号住居跡出土土器　下　ピット４出土遺物

Ⅰ　調　査　状　況

1．調査に至る経過

板橋遺跡は、山梨県北巨摩郡白州町下教来石集落の北西側に所在し、古くより縄文時代の遺物が表面採集されることで知られていた。現況は畑及び熊本県果実農業協同組合連合会白州工場の敷地となっている。

なお、遺跡の主体部と見られる同工場敷は、明治43年、鳳来小学校の建設の際に削平され、多量の土器・石器が発見されたと伝えられている。その後、昭和52年に同小学校が廃校となり、その跡地に昭和57年、同工場が建設され現在に至っている。

しかし、昭和63年10月６日付け、第84号で熊本県果実農業協同組合連合会会長理事三浦八水より、現工場の北側隣接地およそ14,000㎡に工場及び道路増設工事の申請が提出され、審査したところ、板橋遺跡の範囲に含まれる可能性が強いため、試掘調査が必要と判断された。

そのため、町教委では同連合会と協議の上、昭和63年12月７日～９日の３日間、遺跡確認の試掘調査を実施した。その結果、縄文時代早期末から前期初頭と見られる土器片及び住居跡と見られる落ち込み等が検出され、工事予定地のうち白州町下教来石字宮ノ後36番地の内でおよそ1,000㎡について、発掘調査が必要との結論に達した。

この結果を踏まえ、町総務課を含む三者で協議を重ねた結果、平成元年１月13日付けで、町教委が調査主体となり、平成元年１月18日から２月10日の間で発掘調査を実施することとし、調査に係る経費は、同連合会と白州町で分担することで合意し、協定書が締結され、発掘調査のはこびとなった。

平成元年１月９日付けで、熊本県果実農業協同組合連合会会長理事三浦八水より、文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘の届出書を受け、平成元年１月12日付け、白教発第１－13号で、山梨県教育委員会教育長に進達する。

平成元年１月11日付け、白教発第１－10号で、文化財保護法第98条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知書を文化庁長官（県教委経由）に提出する。

2．調査経過

発掘調査は、厳冬期のため大雪や霜柱、さらに地面の凍結と困難な状況のなか、平成元年１月20日に開始され、２月15日に現地調査を完了した。

試掘調査の結果により、遺物包含層は全く認められず、表土（層厚20～30㎝）中における遺物の出土も皆無に近い状態であったため、表土剥ぎはバックホーで行った。大雪による３日間の中断はあったものの、１月20日から１月25日の間で完了した。

第１図　遺跡位置図

第２図　調査位置図（１：1500）

しかし、表土剥ぎ完了後も、調査区域内にはかなりの雪が残っていたため、出来るだけ雪の減るのを待って、２月２日から人力による作業に入った。

まず、２月２日から２月６日の間、遺構検出作業を行い住居跡３基、ピット10基等を検出した。遺物は、ほとんどが住居跡覆土中に限られる状況であった。

次に、遺構発掘及び断面図作成を、２月６日から２月13日まで行った。遺構内の遺物の出土状況は、ピット４から若干の遺物の出土があったほかは、すべて住居跡から出土したもので占められた。

遺構完掘後、２月14・15日の２日間で、写真撮影及び平面図作成作業を行い、調査を完了した。

なお、調査面積は約1,000㎡である。

平成元年２月23日付け、白教発第２－23号で、遺失物法第13条の規定による埋蔵物発見届を長坂警察署長に提出した。

Ⅱ 位 置 と 環 境

1．地 理 的 環 境

板橋遺跡は、山梨県北巨摩郡白州町下教来石地内に所在し、今回発掘調査を実施した場所は、下教来石字宮ノ後36番地である。この遺跡は、下教来石集落の中心部に隣接して位置し、東側を国道20号線がほぼ南北に走っている。また、東へ500mほど離れて釜無川が北西から南東に流れている。標高は690～700mである。

この遺跡周辺の地形は、巨摩山地北端の雨乞山東麓の急峻な断層崖と西側で接する釜無川が形成した、低位段丘及び中位段丘の二面の河岸段丘を基盤としているほか、釜無川の支流である流川より南側には、高位段丘面（鳥原面）が見られる。

この遺跡の立地する中位段丘面は、東側の低位段丘面と比高差30mにも及ぶ急な段丘崖により区切られる。現況は、畑及び住宅地がほとんどである。

なお、中位・高位段丘面にはローム層の堆積が見られるが、低位段丘面には見られない。

2．歴 史 的 環 境

白州町内では、分布調査等により現在63か所の遺跡が知られているが、圃場整備事業に伴う発掘調査を中心に数か所の調査例があるのみで、その他の多くの遺跡の詳細は不明である。

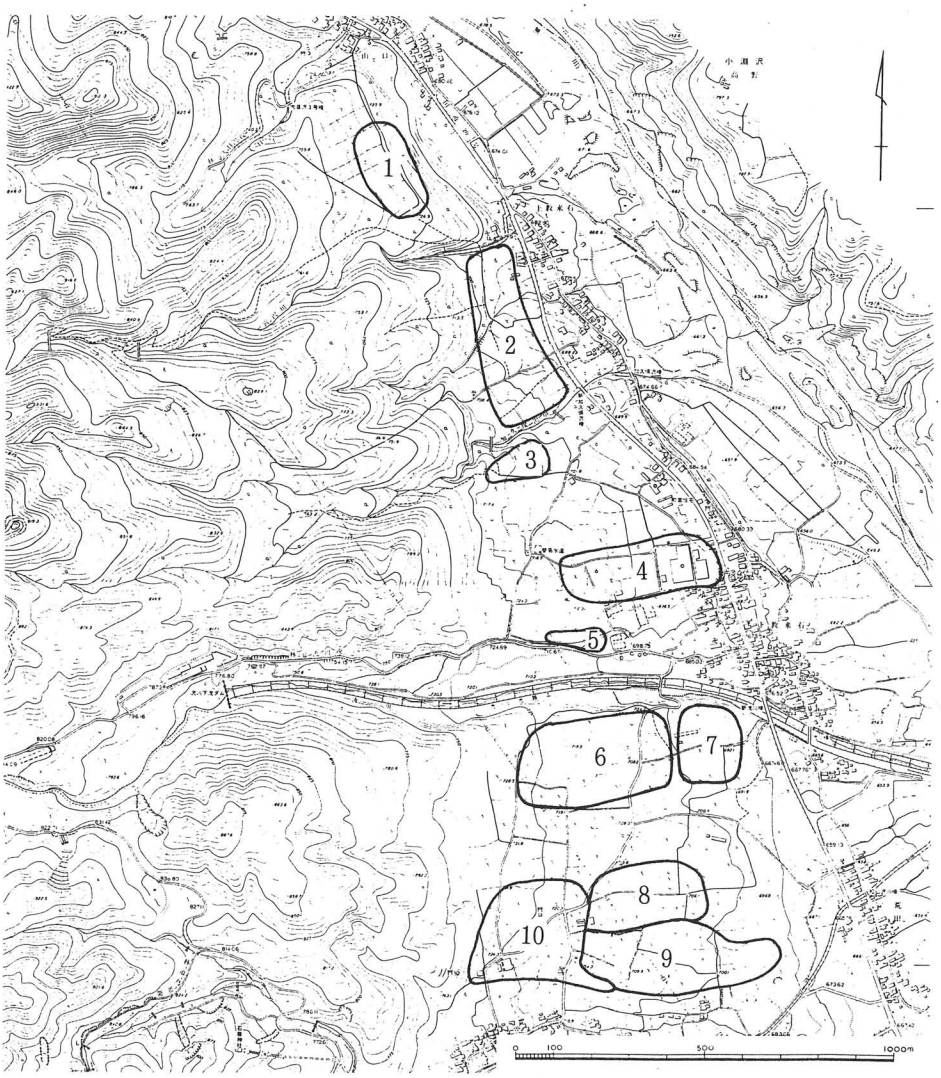
本遺跡及び周辺の遺跡をあげてみると、その立地は下教来石地区及びその北に隣接する上教来石地区では中位段丘面、流川を挟んだ南側の鳥原地区は高位段丘面に位置し、低位段丘面に遺跡は確認されていない。

上教来石地区では、段丘面北端に寺平遺跡があり、縄文・平安・中世の遺物が散布する。その南側には、中世・平安を主体とする宮の前遺跡があり、土師質土器・内耳土器・陶磁器等の中世遺物や平安時代の土師器・灰釉陶器が、広範囲にわたり比較的濃密に散布している。

下教来石地区では、縄文・中世の遺物が散布する加久保遺跡・道明遺跡と、今回の発掘調査の対象となった縄文早期末から前期前葉を主体とする板橋遺跡がある。板橋遺跡は遺物の散布が広範囲にわたっているほか、若干ながら中世遺物も発見されている。

鳥原地区では、広大な段丘面上にいずれも規模の大きな遺跡が5か所知られている。北東端に位置する浦門遺跡は、縄文前期後半から中期及び平安・中世の遺跡であり、その西に隣接する大久保遺跡は、平安・中世を主体とする遺跡である。また、中央部から南側にかけては、南沢・東原・上小用の3遺跡が登録されているが、遺物の分布に途切れがないため、一体のものとして考えた方がよさそうである。発見された遺物は、縄文中期・平安・中世である。

なお、この3遺跡全体が範囲と推定される、中世武川衆の一員である教来石（毛浦吉）氏の館跡があり、中世遺物はそれに関係したものと考えられる。



第3図　板橋遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	番号	遺跡名	所在地	主な時代
1	寺　平	上教来石	縄文・平安・中世	6	大久保	鳥　原	平安・中世
2	宮の前	〃	平安・中世	7	浦　門	〃	縄文(前~中)・平安・中世
3	加久保	下教来石	縄文・中世	8	東　原	〃	縄文(中)・平安・中世
4	板　橋	〃	縄文(早~前)・中世	9	上小用	〃	縄文(中)・平安・中世
5	道　明	〃	縄文(中)・中世	10	南　沢	〃	縄文(中)・平安・中世

以上のように、下教来石地区を中心とする遺跡群は、今回発掘調査を行った板橋遺跡を除き、いずれも縄文中期・平安・中世を主体としているといっても過言ではない。そのなかでも、教来石（毛浦吉）氏館跡を中核とする中世遺跡の極めて多い点は、特に注目されよう。

Ⅲ 遺 構 と 遺 物

本遺跡は、西から東へ穏やかに傾斜した段丘上に立地している。

調査地点は、本遺跡の北側の縁辺に位置し、地目は畑である。耕作土は20～30㎝と浅く、その下層はローム層の地山となり、遺物包含層は見られない。地山面は、調査区域の西側で桑の伐根による攪乱が多数見られるほかは、削平された痕跡は認められない。

さて、発掘した遺構や遺物から本調査地点を概観すると、縄文時代の住居跡３基及び縄文時代と見られるピット10基・配石遺構１基が見られる。

住居跡は、いずれも不正円形で、ほぼ中央に地床炉をもつ。柱穴は４本柱と見られる。出土遺物は、縄文時代早期末から前期初頭と見られる繊維を多量に含む土器と器壁の極めて薄い繊維を含まない土器とが共存している。また、石器では石鏃等の黒曜石加工品及びその石片と磨石が目立つ。遺物は、そのほとんどが住居跡出土である。

ピットは、形状・規模ともさまざまである。そのうち、ピット３は第１号住居跡を切って掘り込まれている。また、ピット９は覆土上層に石組をもつ。ピット４からは、縄文後期と見られる土器片が出土している。このように、ピット４を除き、その時期を決定しがたいが、住居跡ないしはピット４の出土遺物以外の年代を示す遺物の出土はなく、そのいずれかの時期に属するものと考える。

配石遺構も、遺物の出土は見られない。

第１号住居跡（第５～10図、図版１・６～８）

位　置　Ｅ・Ｆ－２・３に位置し、ピット３に切られる。

覆　土　地山面を掘り込んで形成されている。覆土は、第４層がローム層を多量に含む一次堆積土、第３層が床面に散在した植物質の炭化物を含む黒褐色土で、床面の南西側にのみ見られる。第２層は廃絶後にローム粒を含む暗褐色土が、周囲より中心にむかってレンズ状に堆積し、中央の凹地は、第１層の腐植土と見られる黒色土によって覆われている。

形　状　4.6ｍ×4.4ｍの不正円形である。

壁　高　西側が35㎝と最も高く、東側で15㎝を測る。立ち上がりは垂直に近い。

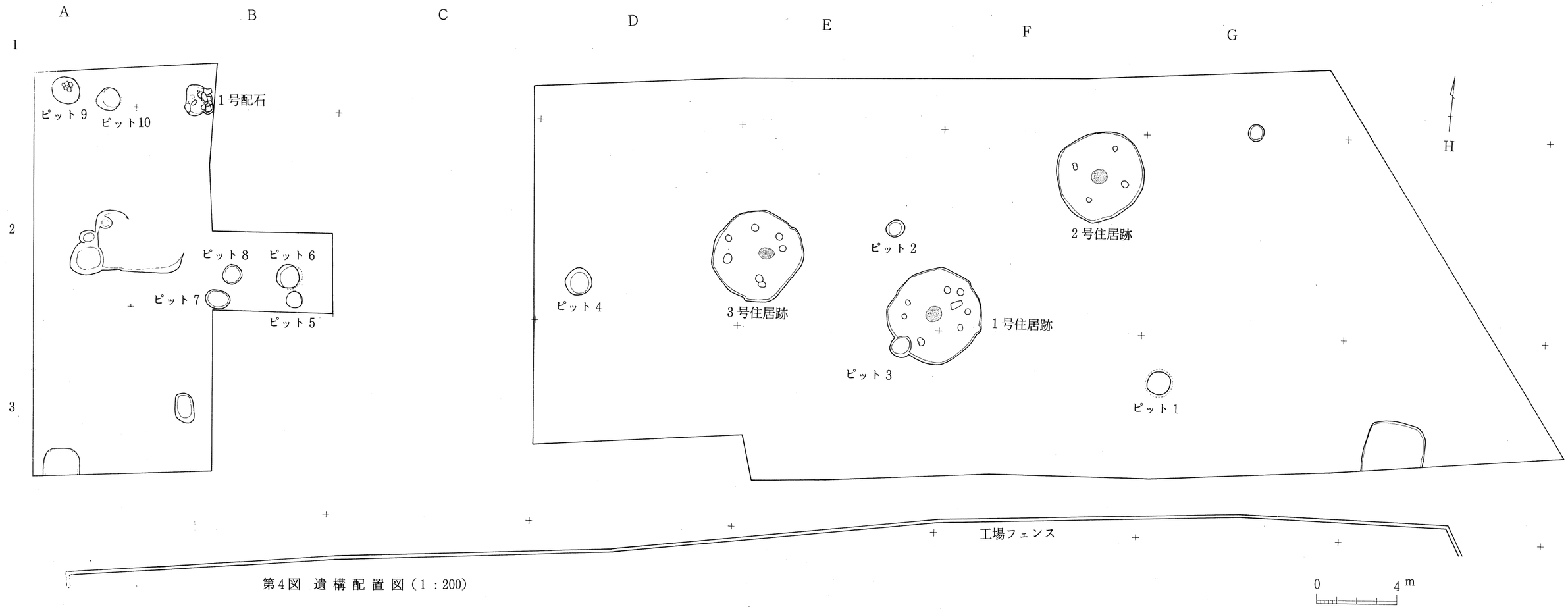
床　面　よくしまった平坦な床面となっている。

炉　　住居のほぼ中央に構築された地床炉で、浅く掘り凹められた直径70～80㎝の範囲に焼土が堆積している。

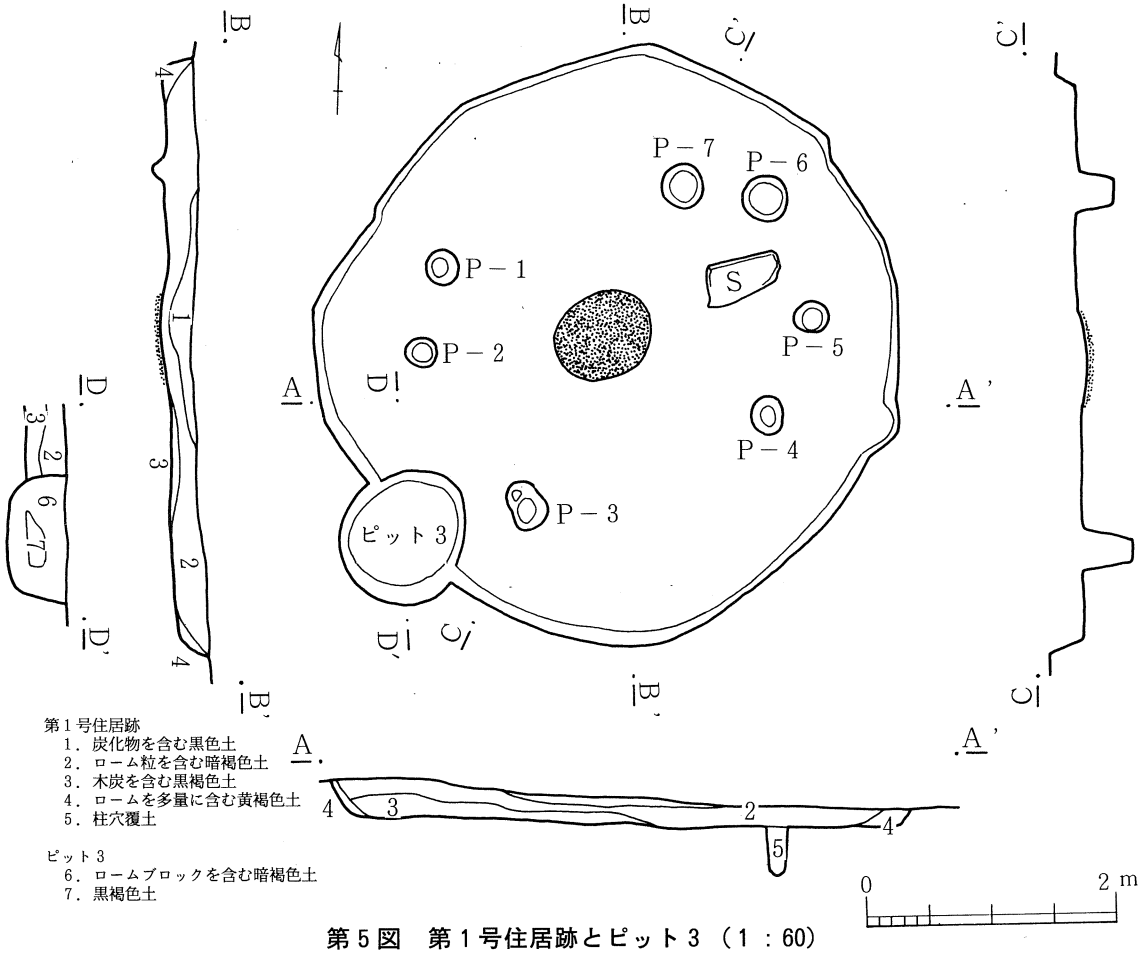
柱　穴　P.１・P.３・P.４・P.７の４本柱と考えられる。柱間寸法はいずれも2.1ｍで、ほぼ正方形に配置している。柱穴の規模は、直径25～30㎝、床面からの深さは32～42㎝を測る。

その他　炉の北東側の床面上に、作業台に使われたものと見られる偏平な河原石が据えられている。

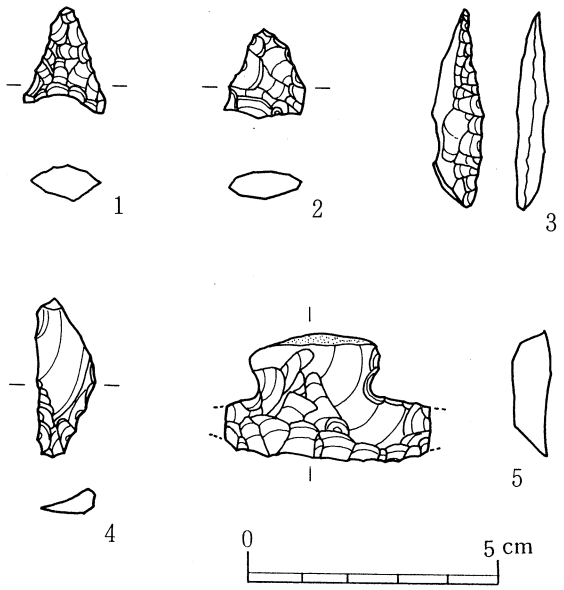
出土遺物　炉の北東側の礫周辺の床面直上より、その大半が出土している。



第4図 遺構配置図（1：200）

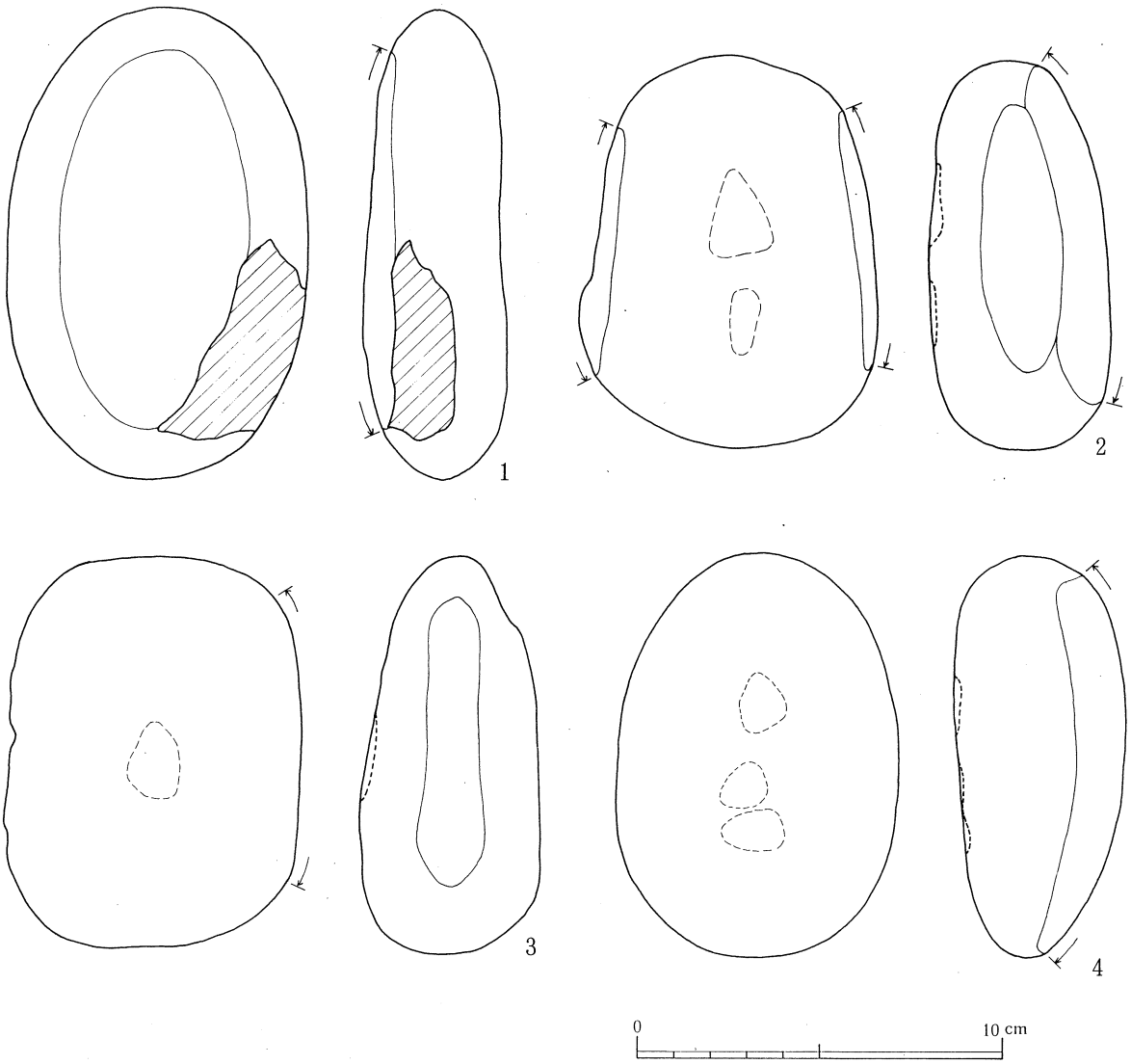


第5図　第1号住居跡とピット3（1：60）



第6図　第1号住居跡出土石器（2：3）

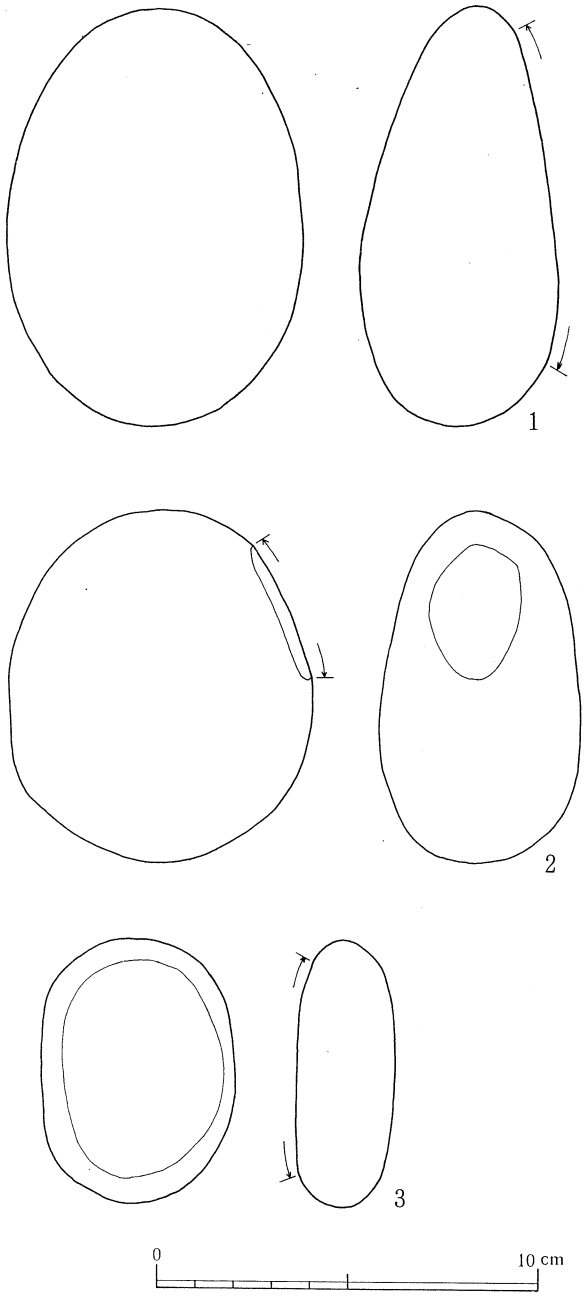
第6図－1．石鏃。長さ 2.1cm、幅 1.6cmの無茎鏃である。全面にわたり細かい剥離調整を行う。黒曜石製である。　2．石鏃未成品。長さ 1.8cm、幅 1.7cmを測る。比較的大きな剥離調整で、三角形を呈する。黒曜石製である。　3．石槍。長さ 4.0cmで左側が欠損している。両面より細かい剥離調整を行う。黒曜石製である。　4．ナイフ状剥片。長さ 3.2cm、幅 1.2cmである。左側の一次加工による鋭利な刃部の下半分に、両面より細かい剥離調整を行う。黒曜石製である。　5．石匙。刃部の両端が欠損しているため現



第７図　第１号住居跡出土石器（１：２）

長 4.2㎝、幅 2.6㎝の横型石匙である。刃部加工は片面より丁寧な剥離調整により仕上げている。つまみは比較的大きい。黒曜石製である。

第７図－１．磨石。長さ 13.0㎝、幅 8.3㎝、厚さ 3.9㎝の楕円形で、斜線部は欠損している。表面の一面のみ使用されている。石材は安山岩である。　２．凹・磨石。長さ 10.8㎝、幅 8.2㎝、厚さ 4.9㎝の隅丸長方形に近い形である。凹石と磨石を兼ねたもので、表面に２か所凹みがある。また、両側面及び裏面の３面を磨り面として使用している。石材は安山岩である。
３．凹・磨石。長さ 10.7㎝、幅 8.1㎝、厚さ 5.0㎝の隅丸長方形である。凹石と磨石を兼ねたもので、表面中央に１か所の凹み、片側面に磨り面がある。石材は安山岩である。　４．凹・磨石。長さ 11.1㎝、幅 7.7㎝、厚さ 4.7㎝の楕円形である。凹石と磨石を兼ねたもので、表面



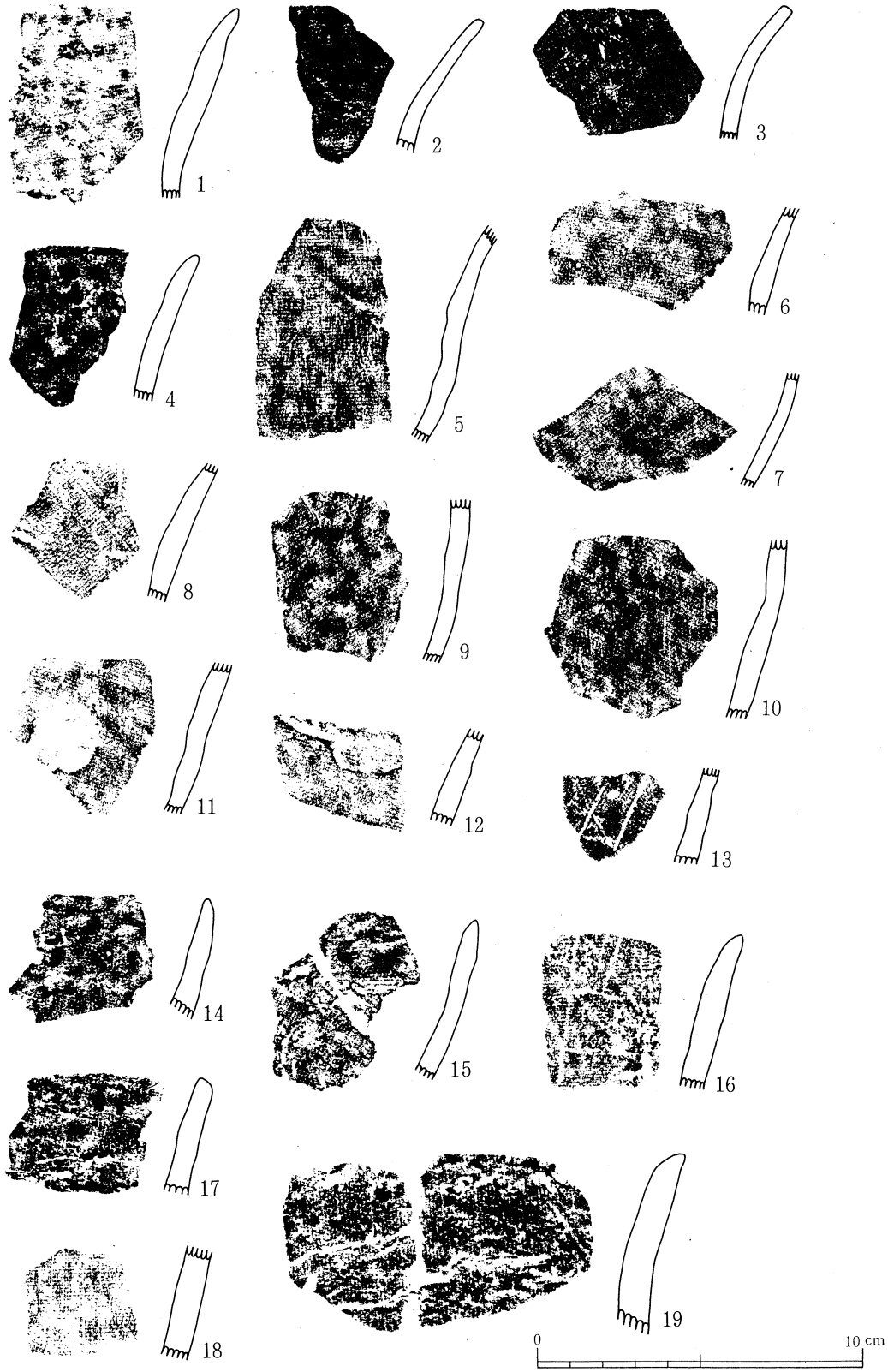
第８図　第１号住居跡出土石器（１：２）

に３か所の凹み、裏面に磨り面がある。石材は安山岩である。

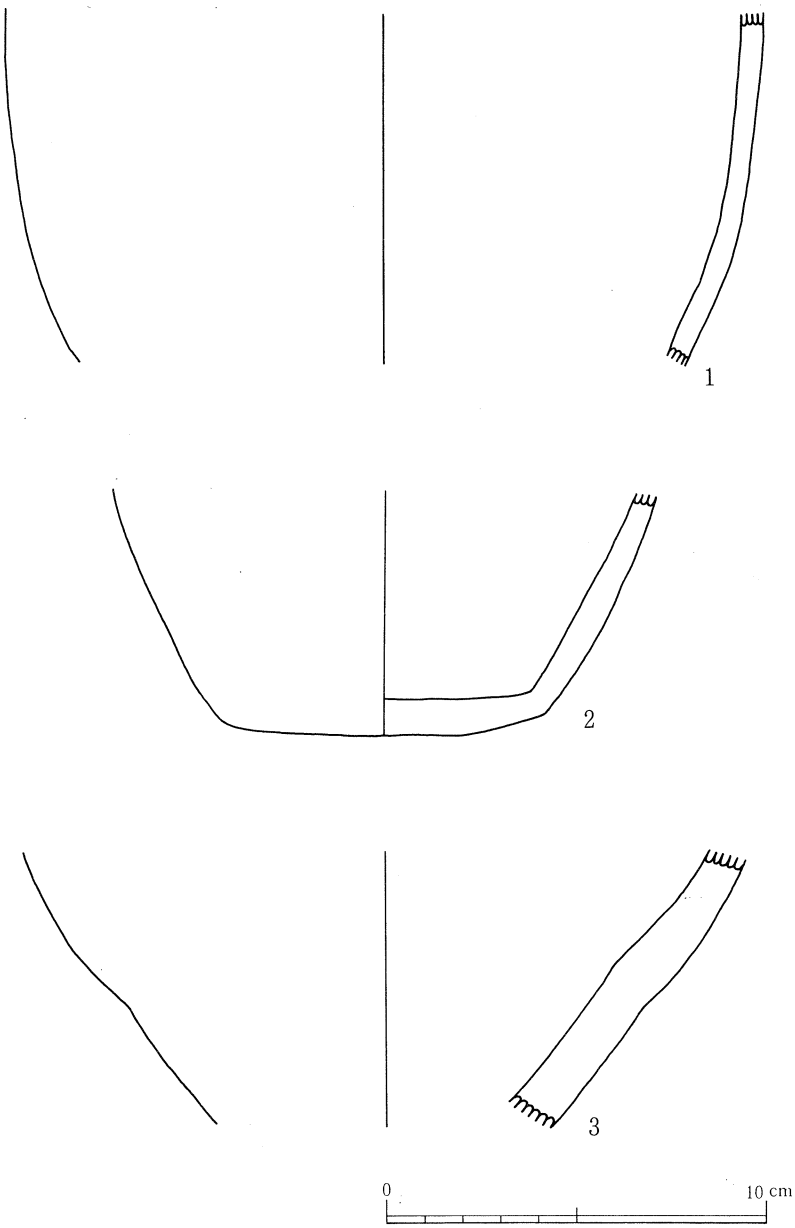
第８図－１．磨石。長さ 11.1㎝、幅 7.8㎝、厚さ 5.3㎝の楕円形である。裏面の一面のみ使用されている。石材は安山岩である。　２．磨石。長さは 9.4㎝、幅 8.0㎝、厚さ 5.3㎝の楕円形である。片側面の一部のみを磨り面として使用している。石材は安山岩である。　３．磨石。長さは 7.0㎝、幅 5.2㎝、厚さ 2.6㎝の楕円形であるが他と比べて小形である。表面の一面のみ使用されている。石材は安山岩である。

本住居跡出土の土器片の総数は 161 点で、うち繊維を含むもの 112点、無繊維のもの49点である。

第９図－１～13は繊維を含まない土器片で、いずれも、胎土に花崗岩粒子を含み、焼成良好、色調は淡茶褐色ないし赤茶褐色を呈する。　１．口縁部。ややくびれながら外反し、先端に稜をもつ。　２．口縁部。器壁は薄く、強く外反する。端部は玉縁状を呈し、刻み目を施す。　３．口縁部。器壁は薄く、よく磨かれている。強く外反し、端部に面をもつ。　４．口縁部。やや外反し、端部を丸くおさめる。　５．胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は丸く膨らみ、口縁部は外反する。外面に縦方向の調整を行う。胴部内面には指頭痕が見られる。　６．胴部。器壁は薄く、よく磨かれている。外面に縦方向の調整が見られる。　７．胴部。器壁は薄く、よく磨かれている。やや膨らみをもち、外面には条痕を施す。　８．口縁部。やや外反する。外面には平坦な工具による沈線を格子文状に施す。９．胴部。器壁は薄く、やや膨らみをもつ。外面には条痕を施す。　10．胴部。器壁は薄く、やや膨らみをもつ。外面に縦方向の調整を行い、内面に指頭痕が見られる。　11．胴部。器壁



第９図　第１号住居跡出土土器（１：２）



第10図　第１号住居跡出土土器（１：２）

は薄く、膨らみをもつ。外面に縦方向の調整を行い、内面に指頭痕が見られる。　12. 胴部。外面に縦方向の調整を行い、内面に斜方向に背圧文を施す。　13. 胴部。器壁は極めて薄く、やや丸みをもつ。外面に格子文を施す。

第９図－14～19は繊維を含む土器片で、器壁は厚い。焼成はやや不良で、淡茶褐色を呈するものが目立つ。14. 口縁部。やや内弯し、端部に弱い稜をもつ。　15. 口縁部。やや内弯し、端部に弱い稜をもつ。外面に背圧文を施す。　16. 口縁部。先端部がやや外反する。外面に格子文状沈線を施す。　17. 口縁部。先端をやや内弯させ、丸くおさめる。器面は内外面とも磨かれている。　18. 胴部。外面に縦方向の調整を行う。　19. 口縁部。わずかに外反し、端部を丸くおさめる。

第10図－１．胴部。繊維を多量に含む。内外面とも無文で、指おさえ調整痕のみ見える。２．底部及び胴部下半。繊維を含む。底部は平底に近いが、胴部との稜は明瞭ではない。胴部は直線的に開き、外面に縦方向の調整を行い、内面には指頭痕が見える。また、胴部下端にはよく磨かれた浅い沈線状の調整を行う。　３．胴部下半。繊維を含み、器壁は極めて厚い。底部は尖底と考えられ、直線的に開き、中段でわずかにくびれた後丸みをもって立ち上がる。内外面とも無文である。

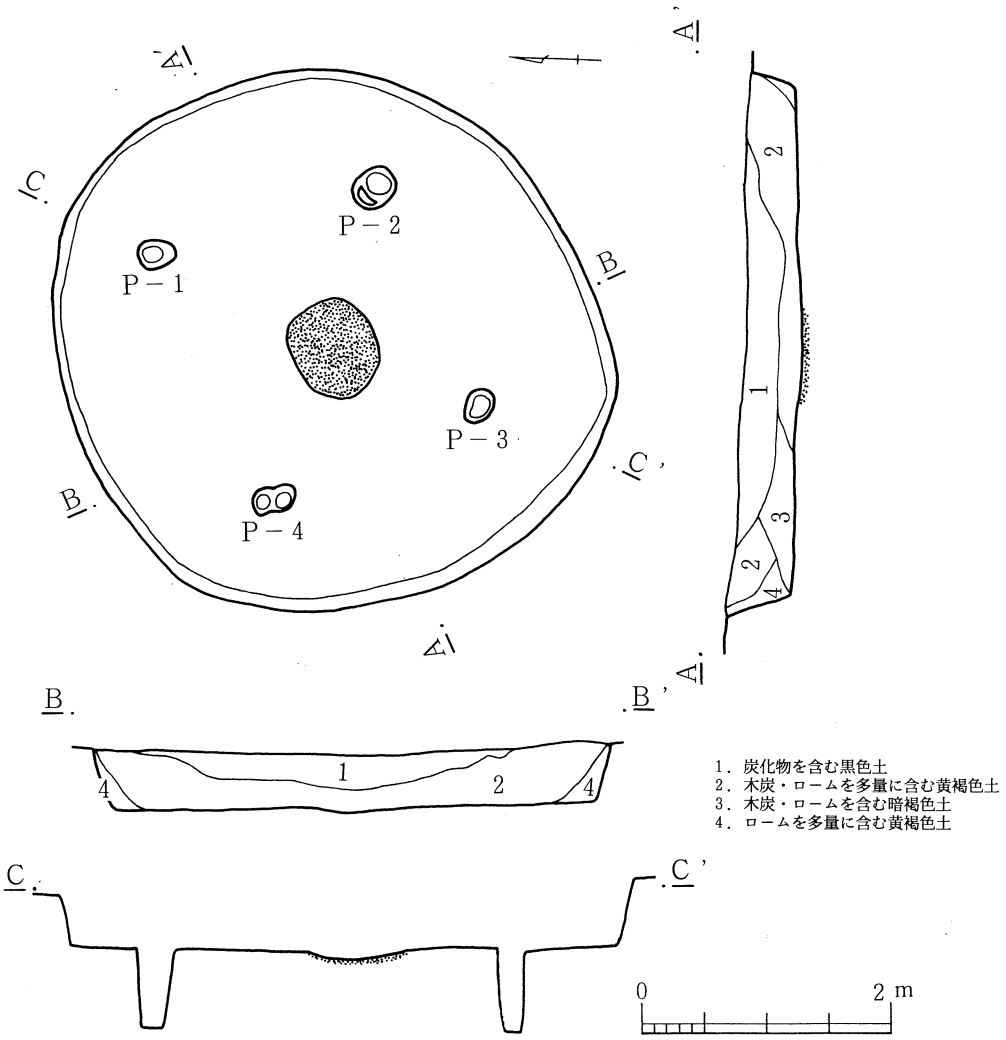
小　結　本住居跡の出土土器には、繊維を含むものと含まないものがあるが、器面はいずれも無文ないし縦方向の調整痕が認められるのみで、縄文を施文したものは１点もない。

第２号住居跡（第11～14図、図版２・６・10）

位　置　Ｆ－２に位置し、第１号住居跡より北東におよそ６ｍ離れている。

覆　土　地山面を掘り込んで形成されている。覆土は、第４層がロームを多量に含む一次堆積土。第２層は床面に散在した植物質の炭化物と廃絶後に周囲より流れこんだロームの混じり合ったものでレンズ状に堆積している。第３層は、第２層が堆積後まだ凹地の残った状態で生じた攪乱と見られる。第１層は腐植土と見られる黒色土である。

形　状　4.4ｍ×4.2ｍの不正円形である。



第11図　第２号住居跡（１：60）

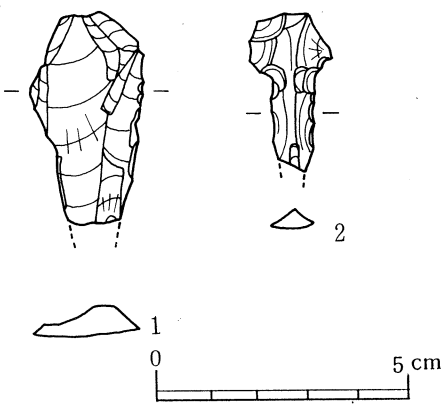
壁　高　40～50㎝と深く、立ち上がりは垂直に近い。

床　面　よくしまった平坦な床面となっている。

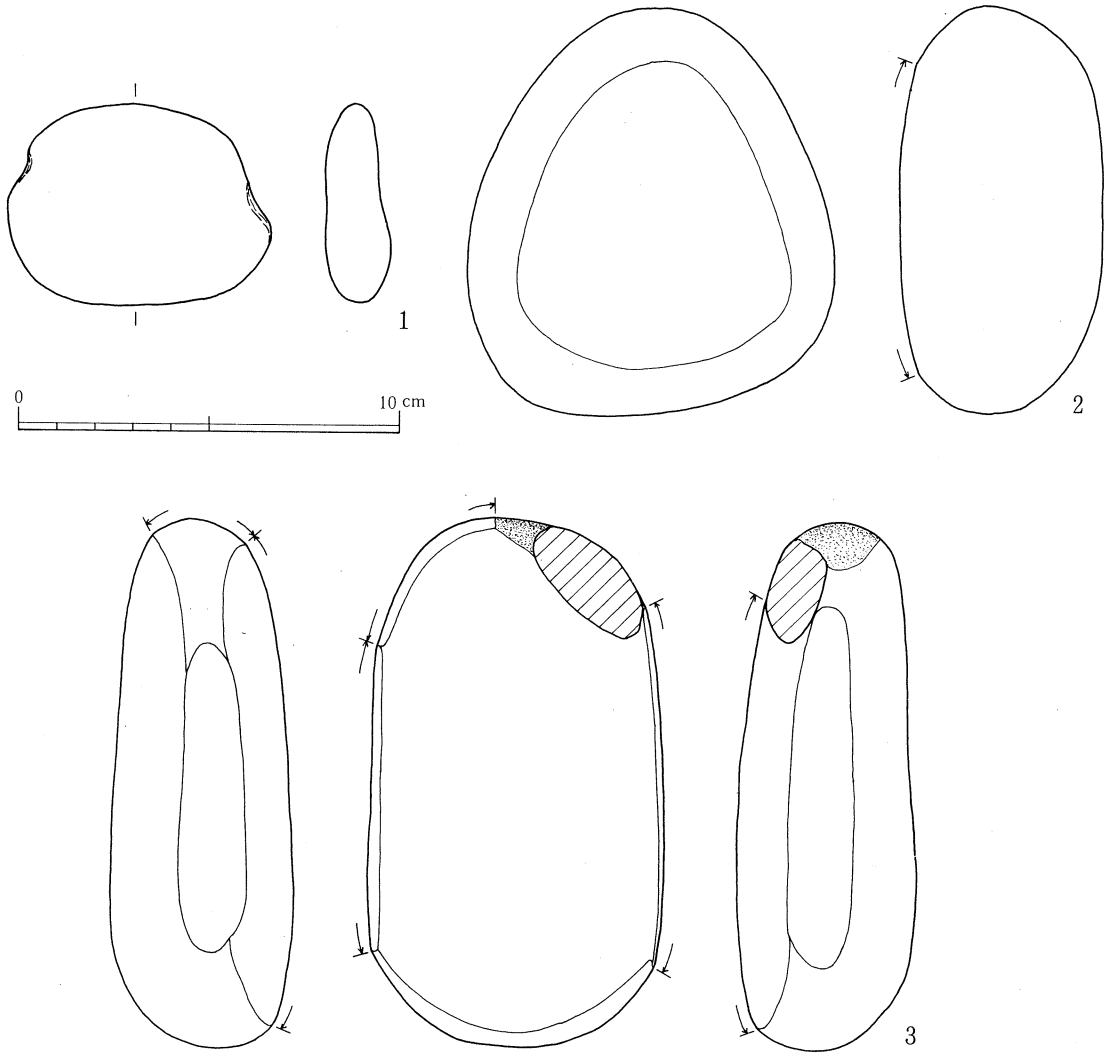
炉　　住居のほぼ中央に構築された地床炉で、浅く掘り凹められた直径70～80㎝の範囲に焼土が堆積している。

柱　穴　P.1～P.4の4本柱で、柱間寸法は 1.9m×2.1mで、ほぼ長方形である。柱穴の規模は、直径25～30㎝で、床面からの深さは、P.4のみ30㎝と浅いが、他は60㎝前後を測る。

出土遺物　いずれも床面直上より出土している。

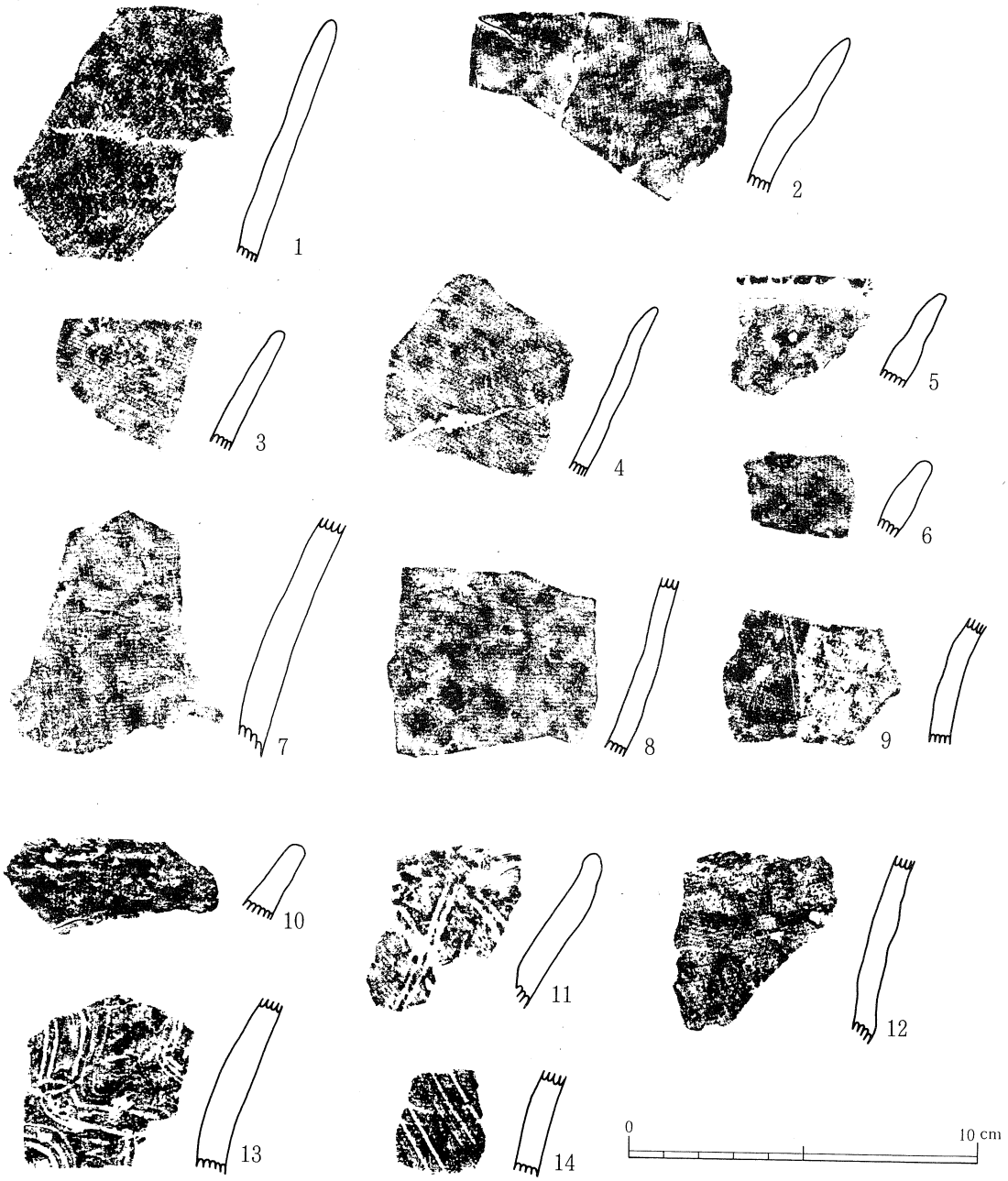


第12図　第2号住居跡出土石器（2：3）



第13図　第2号住居跡出土石器（1：2）

第12図－１．削器。刃部の一部を欠き、現長 4.3cmである。一次加工による断面三角形の剥片の左側を刃部とし、右側の稜は細かい剥離調整により刃つぶしを行っている。黒曜石製である。　２．石錐未成品。錐部の一部を欠き、現長 3.2cmである。断面三角形の剥片に、大まかな剥離調整を加え、錐部の素形及びつまみ部とを区別した段階の遺物であり、錐部の細かい調整は行われていない。黒曜石製である。



第14図　第２号住居跡出土土器（１：２）

第13図－１．石錘。長さ 7.0㎝、幅 5.3㎝、厚さ 1.7㎝の偏平な河原石の両側に、抉りを加えている。粘板岩製である。　２．磨石。長さ 10.7㎝、幅 9.7㎝、厚さ 5.3㎝の隅丸三角形である。表面の一面のみ使用されている。石材は安山岩である。　３．磨石。長さ 14.0㎝、幅は 7.8㎝、厚さ 4.7㎝の楕円形で、斜線部は欠損している。表面、両側面及び上部先端の４面を磨り面として使用している。特に表面は磨石斧の面のようによく磨られている。石材は安山岩である。

本住居跡出土の土器片の総数は 111点で、繊維を含むもの62点、無繊維のもの49点である。

第14図－１～９は繊維を含まない土器片で、いずれも、胎土に花崗岩粒子を含み、焼成良好で、色調は淡茶褐色ないし茶褐色を呈する。　１．口縁部。ほぼ直線的に開き、端部を丸くおさめている。器壁は薄く、外面に縦方向の調整を行い、内面に指頭痕が見られる。　２．口縁部。やや外反し、端部に稜をもつ。外面の口縁部上半に横方向、下半から胴部にかけては縦方向の調整を行う。内面には指頭痕が見られる。　３．口縁部。やや外反し、端部を丸くおさめる。外面に横方向の調整を行う。　４．口縁部。わずかに外反し、端部を丸くおさめている。器壁は薄く、外面端部付近に横方向、下半から胴部にかけて縦方向の調整を行い、内面には指頭痕が見られる。　５．口縁部。直線的に開き、端部に面をもつ。端部には刻み目を施す。
６．口縁部。わずかに外反し、端部に面をもつ。内外面とも横方向の調整を行う。　７．口縁部下半から胴部上半。口縁部はやや外反する。内面及び口縁部外面に横方向、胴部に縦方向の調整を行う。器面はよく磨かれている。　８．胴部。やや膨らみをもって立ち上がる。器壁は薄く、外面に縦方向の調整を行う。内面には指おさえ痕が見える。　９．口縁部下半から胴部上半。口縁部はやや外反する。外面には斜行する細線文が施され、内面には指頭痕が見える。

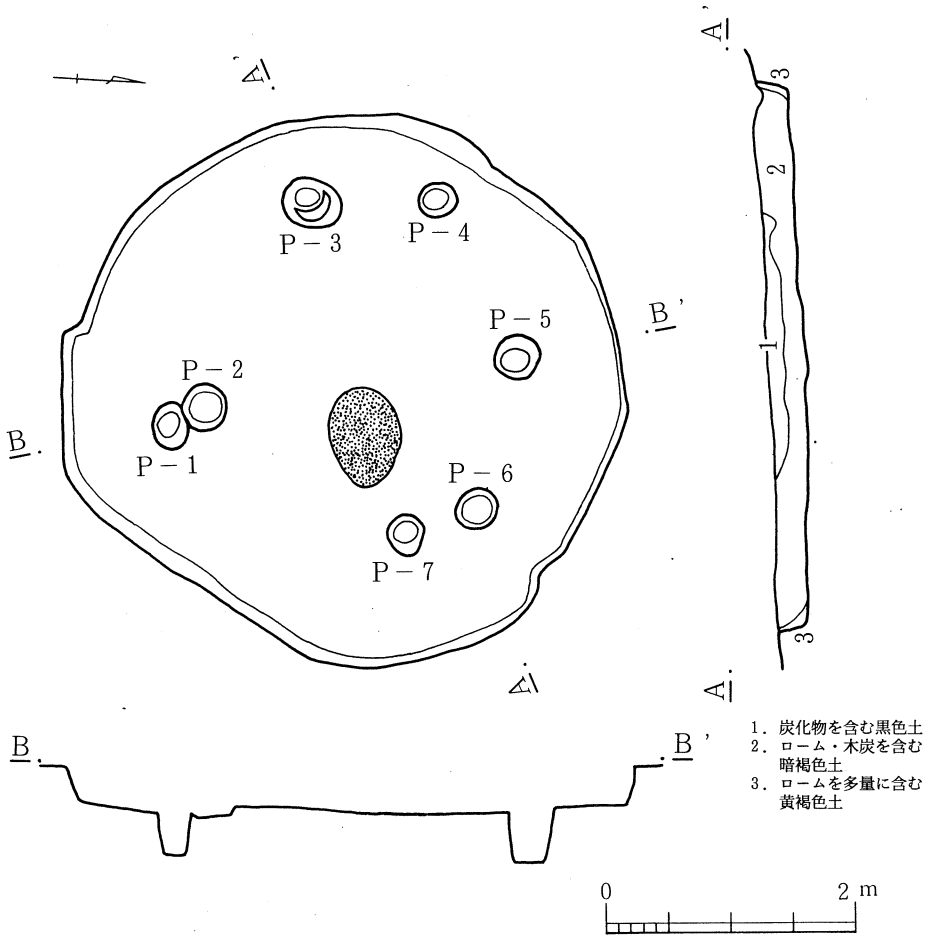
第14図－10～14は繊維を含む土器片で、器壁は厚い。焼成はやや不良のものもあり、色調は淡茶褐色ないしは茶褐色である。　10. 口縁部。外反し、端部を丸くおさめている。内外面とも横方向の調整を行う。　11. 口縁部。外傾した後内弯し、端部は丸くおさめる。外面に平行沈線格子文を施す。　12. 口縁部下半から胴部上半。やや外反する。外面には斜方向の条痕を密に施し、内面にも斜方向の条痕が見られる。　13. 胴部。やや外反する。外面には先端のとがった工具と平坦な工具の組み合わせによる沈線文を施す。　14. 胴部。外面に先端のとがった工具と平坦な工具を用いて、斜方向の沈線文を施す。

小　結　本住居跡の出土土器は、第１号住居跡と同様に繊維を含むものと含まないものがあるが、縄文を施文したものは１点もない。年代は、特徴の共通性から見て第１号住居跡と同時期と考えられる。

第３号住居跡（第15～20図、図版２・６・９）

位　置　Ｄ・Ｅ－２に位置し、第１号住居跡より西におよそ５ｍ離れている。

覆　土　地山面を掘り込んで形成されている。覆土は、第３層がロームを多量に含む一次堆積土。第２層は床面に散在した植物質の炭化物と廃絶後に周囲より流れ込んだロームの混じり合ったものでレンズ状に堆積している。第１層は腐植土と見られる黒色土で、凹地を覆っている。



第15図　第３号住居跡（１：60）

形　状　4.5m×4.2mの不正円形である。

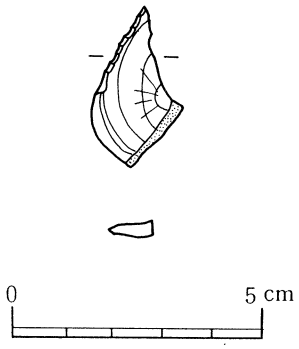
壁　高　25～30cmで、立ち上がりは垂直に近い。

床　面　よくしまった平坦な床面となっている。

炉　　住居の中央やや北東寄りに構築された地床炉で、浅く掘り凹められた60cm×80cmの楕円形の範囲に焼土が堆積している。

柱　穴　P.１・P.３・P.５・P.７の４本柱と考えられる。柱間寸法は 1.8～ 2.1 mである。柱穴の規模は、直径30～35cm、床面からの深さはP.７のみ13cmと浅いほかは、36～42cmを測る。

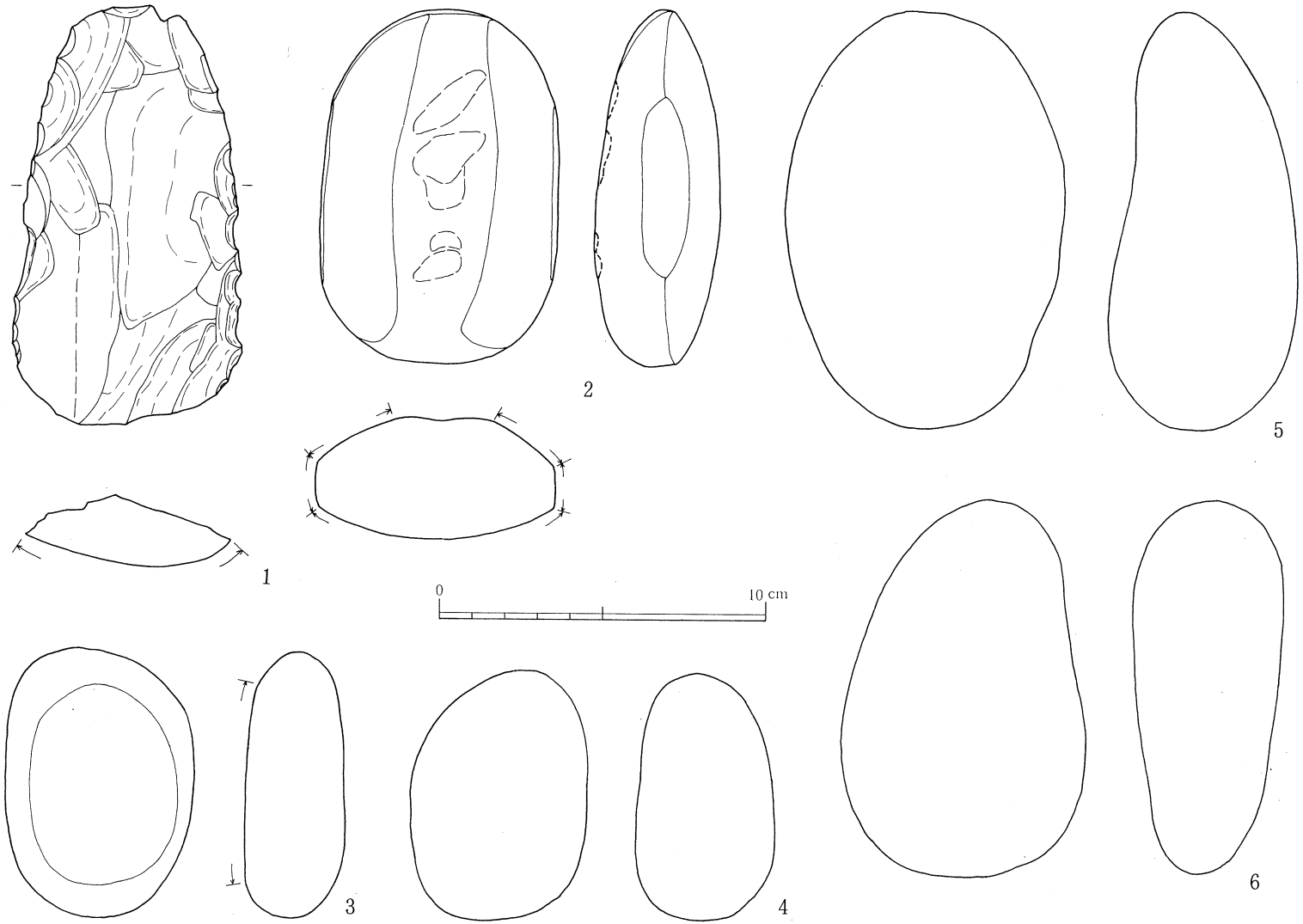
出土遺物　炉の周辺の床面直上より、その大半が出土している。



第16図　第３号住居跡出土石器（２：３）

第16図. 不定形石器。右側弯曲部が欠損しているため全容は不明である。左側に細かい剥離調整が見られる。黒曜石製である。

第17図－１. 打製石斧未成品。長さ 12.9cm、幅 7.1cm、厚さ 2.1cmで、表面は刃部を除き、調整が加えられているが、裏面は自然面のまま、加工は全く加えられていない。石材は粘板岩

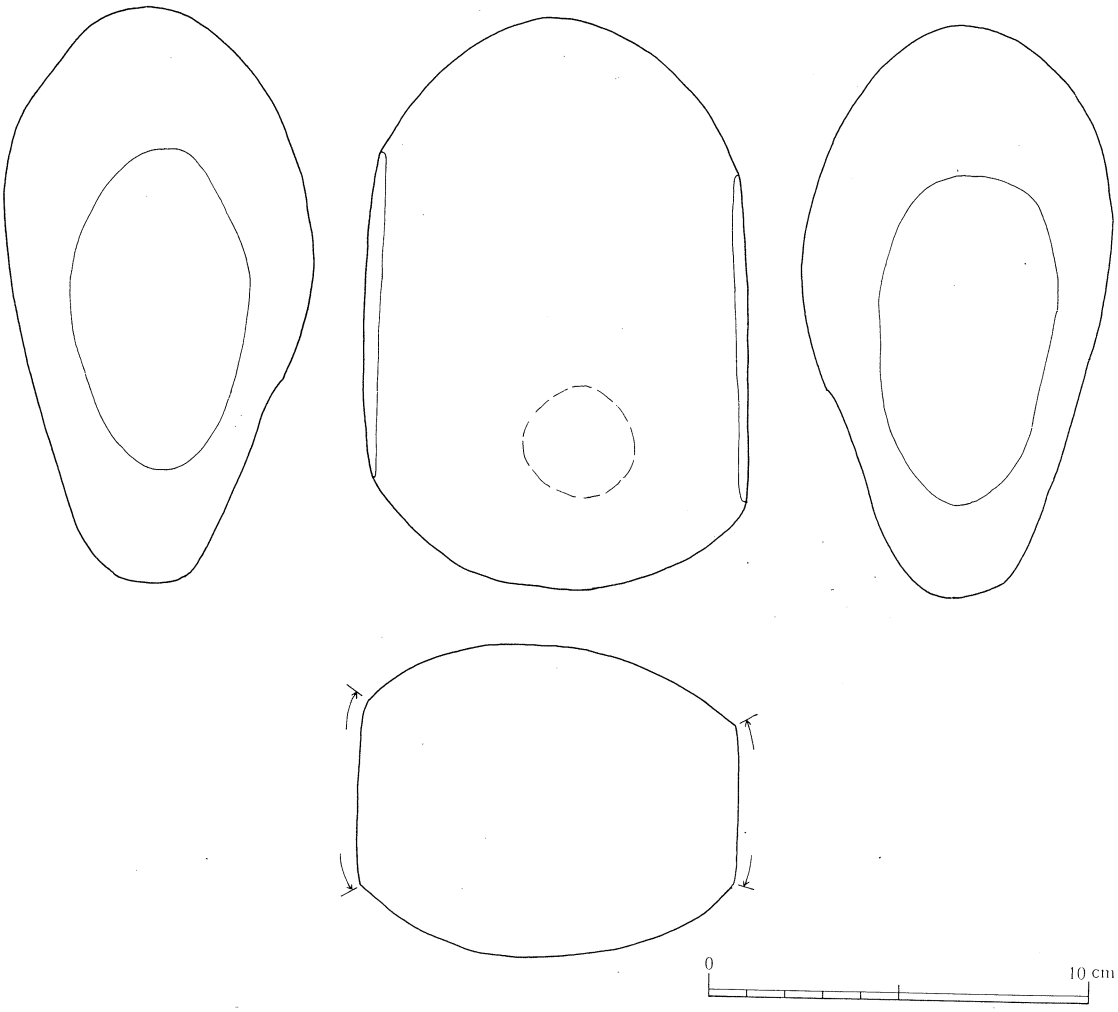


第17図　第３号住居跡出土石器（１：２）

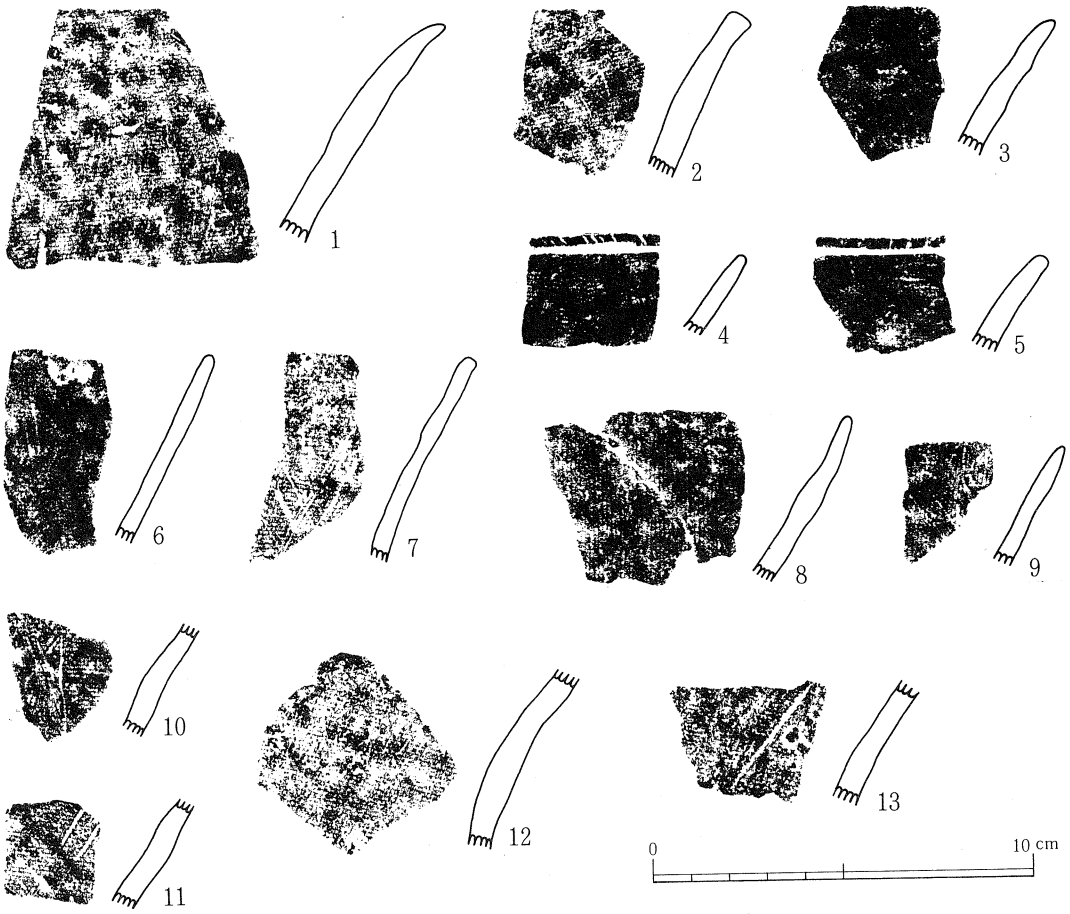
である。　2．凹・磨石。長さ 10.9㎝、幅 7.3㎝、厚さ 3.8㎝の楕円形である。凹石と磨石を兼ねたもので、表面に5か所浅い凹みがある。また、裏面、両側面及び凹み部を除く表面両側の5面を磨り面として使用している。磨り面いずれもよく使用され、一部光沢も見られる。石材は安山岩である。　3．磨石。長さ 8.3㎝、幅 5.8㎝、厚さ 3.0㎝の楕円形である。表面の一面のみ使用されている。石材は安山岩である。　4～6．磨石素材。いずれも安山岩である。大きさは、4が長さ 7.7㎝、幅 5.5㎝、厚さ 4.3㎝で、5が長さ 12.8㎝、幅 8.6㎝、厚さ 5.8㎝で、6が長さ 11.6㎝、幅 7.5㎝、厚さ 4.6㎝を測る。

第18図. 凹・磨石。長さ 15.1㎝、幅 10.1㎝、厚さ 8.1㎝の楕円形である。凹石と磨石を兼ねたもので、表面に1か所浅い凹みがある。また、両側面の2面を磨り面として使用している。磨り面はよく使用されている。石材は安山岩である。

本住居跡出土の土器片の総数は94点で、うち繊維を含むもの43点、無繊維のもの51点で、無繊維の土器の比率が高い。



第18図　第3号住居跡出土石器（1：2）

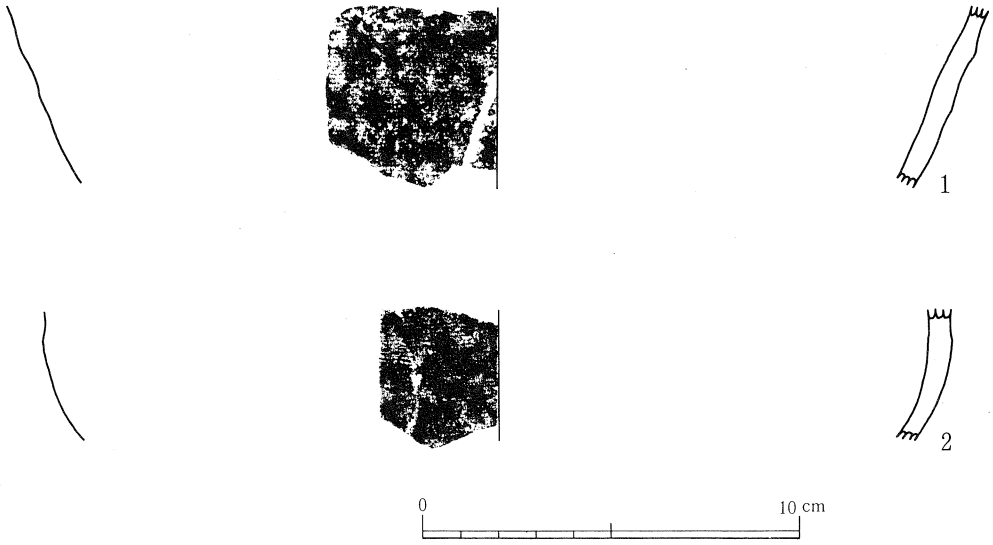


第19図　第３号住居跡出土土器（１：２）

第19図－１～12は繊維を含まない土器片で、いずれも、胎土に花崗岩粒子を含み、焼成良好で、色調は淡茶褐色ないし赤茶褐色を呈する。　１．口縁部。外反し、端部に稜をもつ。外面に縦方向の調整を行い、内面には指おさえ痕がある。　２．口縁部。やや外反し、端部に面をもつ。外面に縦方向の調整を行う。　３．口縁部。ゆるく外反し、端部に稜をもつ。器壁は薄く、外面に縦方向、内面に横方向の調整を行う。　４．口縁部。直線的に開き、端部は丸くおさめる。端部に刻み目を施す。器壁は薄い。　５．口縁部。ゆるく外反し、端部は丸くおさめる。端部に刻み目を施す。器壁は薄く、内外面とも横方向の調整を行う。　６．口縁部。直線的に開き、端部は丸くおさめる。器壁は薄く、外面に縦方向の調整を行い、内面には指頭痕が見える。　７．口縁部。ゆるく外反し、端部は弱い面をもつ。端部に細い刻み目を施す。器壁は薄く、外面に平行細線格子文を施す。　８．口縁部。やや内弯し、端部は丸くおさめる。器壁は薄く、外面に縦方向の調整を行う。　９．口縁部。ほぼ直線的に開き、端部に稜をもつ。器壁は極めて薄く、外面に斜方向の細線を施す。　10．口縁部下半から胴部上半。口縁部はゆるく外反する。器壁は薄く、外面に平行細線格子文を施す。　11．胴部。器壁は薄く、外面には格子文を施す。　12．口縁部下半から胴部上半。口縁部はゆるく外反する。内面横方向、外

面縦方向の調整を行う。

第19図－13. 口縁部下半から胴部上半。繊維を含む土器片で、焼成良好、赤茶褐色を呈する。口縁部はゆるく外反する。外面に調整に伴うものと見られる、斜方向の沈線が見える。



第20図　第３号住居跡出土土器（１：２）

第20図－１. 胴部。無繊維の土器片で、胎土に花崗岩粒子を多量に含み、焼成良好で、淡茶褐色を呈する。器壁は薄く、外面に指おさえ調整及び斜方向の調整を行う。　２. 胴部。無繊維の土器片で、胎土に花崗岩粒子を多量に含み、焼成良好、淡茶褐色を呈する。器面はやや膨らみをもち、外面に縦方向の調整を行い、内面に指頭痕が見える。

小　結　本住居跡の出土土器は、第１・２号住居跡と同様に繊維を含むものと含まないものがあるが、縄文を施文したものは１点もない。年代は、特徴の共通性から見て第１・２号住居跡と同時期と考えられる。

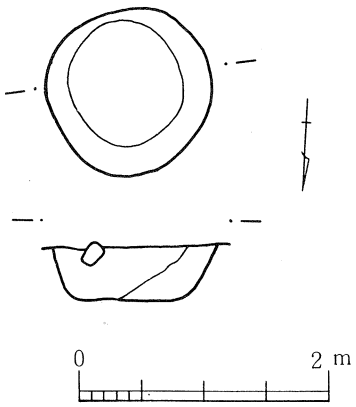
ピット４（第21～24図、図版４・10）

位　置　Ｄ－２に位置する。

覆　土　第１層が木炭を含む暗褐色土、第２層がロームを多量に含む黄褐色土である。なお、第１層上面より礫が出土している。

形　状　口径130㎝、深さ45㎝でたらい状を呈する。

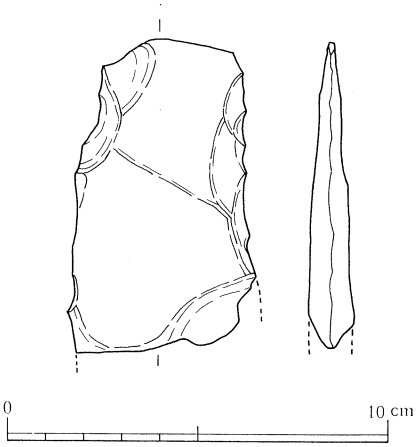
出土遺物　第１層中より、打石斧１点、土器片４点が出土している。



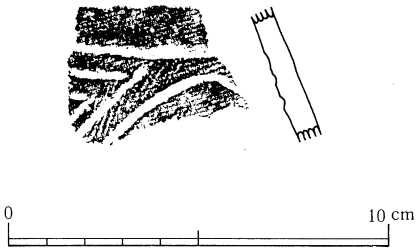
第21図　ピット４（１：60）

第22図. 打石斧。刃部が欠損しているため現長 8.3㎝、幅

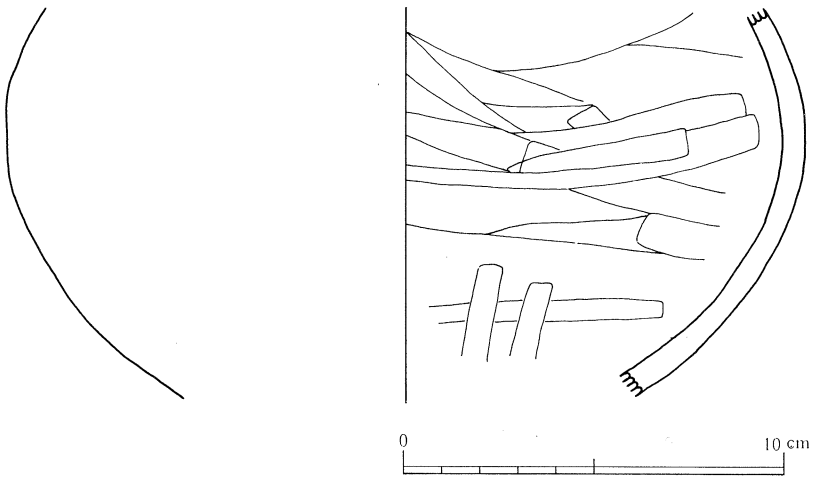
5.0㎝、厚さ 1.2㎝を測る。形状は短冊形と見られ、基部に抉りを入れている。石材は粘板岩である。



第22図　ピット４出土石器（１：２）



第23図　ピット４出土土器（１：２）



第24図　ピット４出土土器（１：２）

第23図．胎土は精選された花崗岩粒を含み、焼成良好で、赤茶褐色を呈する。外面はよく研磨した後、沈線により区画し、区画内に縄文を充填する。

第24図．無文土器胴部。胎土は精選され金雲母を含む。焼成良好で、茶褐色を呈する。外面はヘラ状工具によると見られる、ケズリないしはミガキ調整がかすかに確認できる。内面は横方向のナデ調整後、ヘラ状工具によると見られるミガキ調整を行う。

小　結　ピット４の年代は、第23図の土器片の特徴から見て、縄文時代後期前半の所産と考えられる。

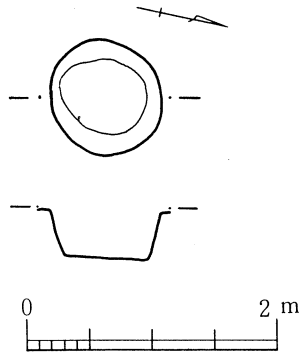
ピット３（第５図、図版１）

位　置　Ｅ－３に位置し、第１号住居跡の南西側の壁を切っている。

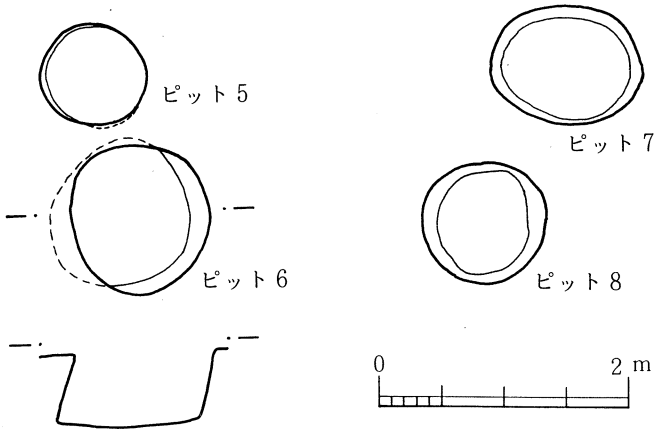
覆　土　黒褐色土の大きなブロックを内包する、ロームブロックを含む暗褐色土である。

形　状　口径105～110㎝、深さ50㎝でたらい状を呈する。

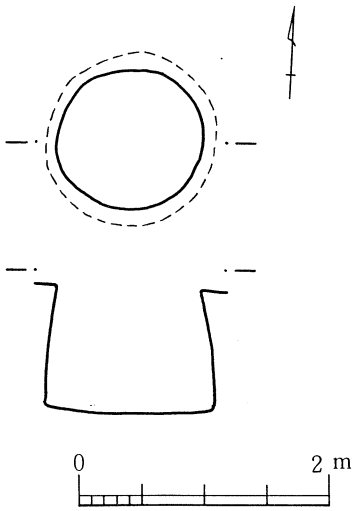
小　結　ピット３の年代は、第１号住居跡より新しいものの、出土遺物が全くないため、決定することはできない。



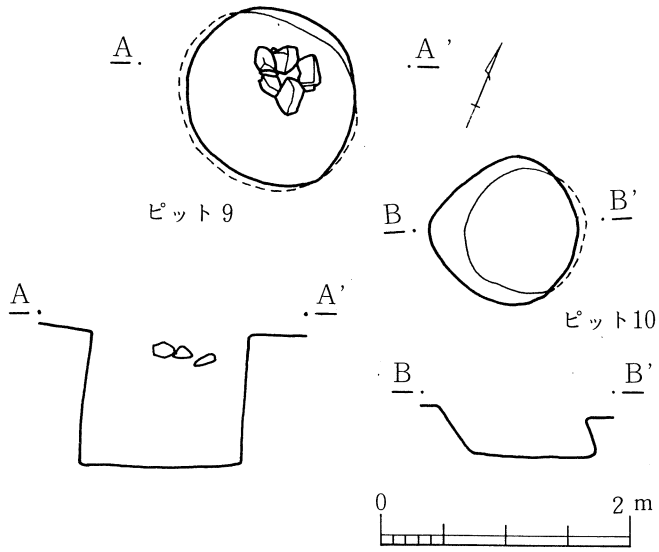
第25図　ピット２（１：60）



第26図　ピット５～８（１：60）



第27図　ピット１（１：60）



第28図　ピット９・10（１：60）

ピット２（第25図、図版３）

位　置　Ｅ－２に位置する。

形　状　口径90～95㎝、深さ40㎝でたらい状を呈する。

小　結　出土遺物がないため、年代を決定することはできない。

ピット５～８（第26図、図版４）

位　置　Ｂ－２に４基まとまって検出された。

形　状　発掘後、霜柱により壁が崩落し、原形を失ったが、いずれも小型フラスコ状ピットである。完掘時の計測値は、ピット５が、口径75㎝、底径80～85㎝、深さ55㎝で、ピット６が、口径80㎝、底径115㎝、深さ63㎝である。また、ピット７は、口径100～120㎝、底径80～100

cm、深さ40 cmで、ピット 8 は、口径75～85 cm、底径80 cm、40 cmを測る。

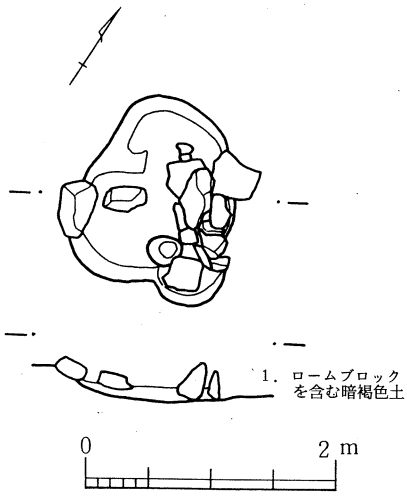
小　結　出土遺物がないため、年代決定はできない。

ピット 1（第27図、図版 3）

位　置　G－3に位置する。

形　状　口径 110～120cm、底径 140cm、深さ 100cmのフラスコ状ピットである。基底部に小ピットは見られない。

小　結　出土遺物がないため、年代決定はできない。



第29図　第 1 号配石（1 : 60）

ピット 9（第28図、図版 5）

位　置　A－1に位置する。

形　状　口径 130～ 140cm、底径 130～ 140cm、深さ 110cmで軽いフラスコ状を呈す。覆土上層に数個の礫を用いた石組を配している。

小　結　出土遺物がないため、年代決定はできない。

ピット10（第28図、図版 5）

位　位　A－1に位置する。

形　状　口径 110～ 120cmの不定形で、深さ30～35cmを測り、一部小型フラスコ状となっている。

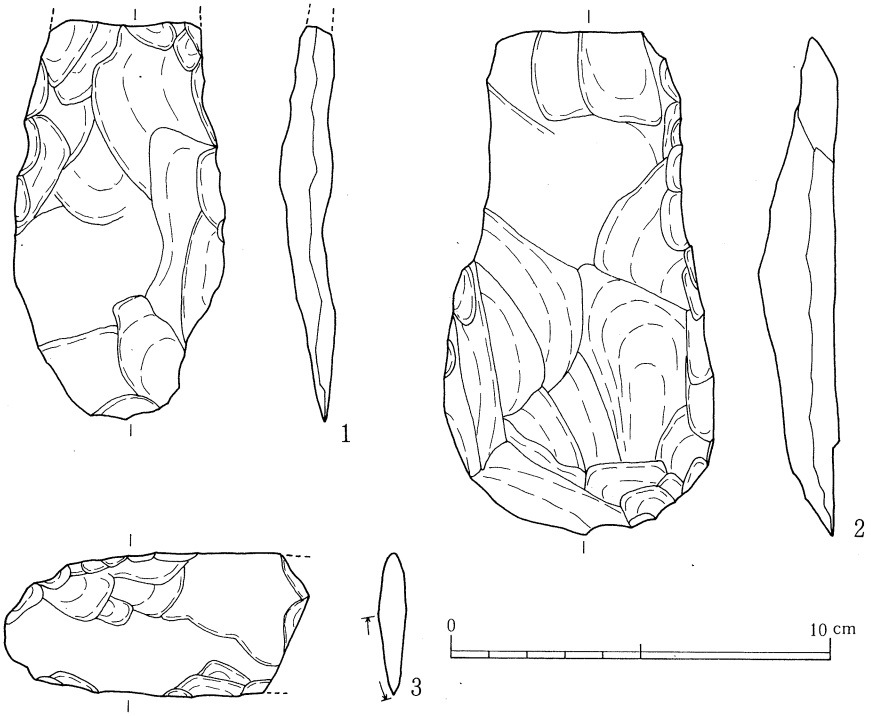
小　結　出土遺物がないため、年代決定はできない。

第 1 号配石（第29図、図版 5）

位　置　B－1に位置する。

形　状　160cm×120 cmの楕円形の浅い凹みのなかに、十数個の河原石を中心とした礫を組み合わせている。

小　結　出土遺物がないため、年代決定はできない。



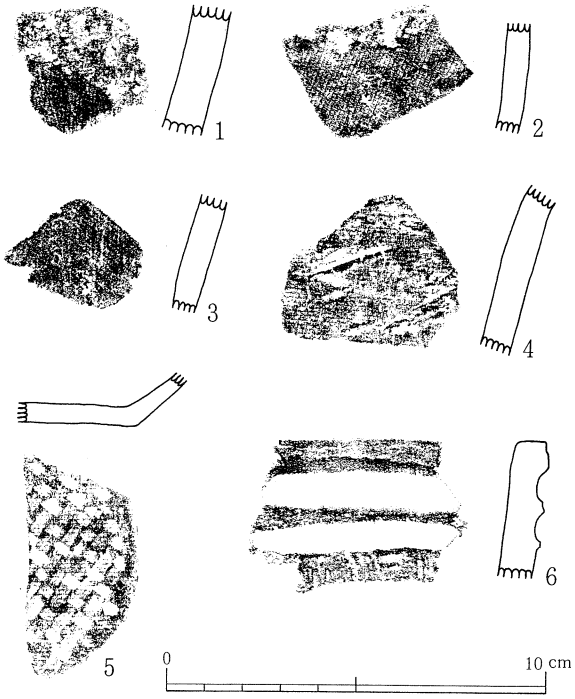
第30図　グリッド出土石器（1 : 2）

グリッド出土石器（第30図）

グリッド出土の石器には、打石斧・横刃形石器があるほか、黒曜石の砕片が数点検出されている。

1．打製石斧。基部及び刃部の一部が欠損し、現長は10.5㎝、幅5.6㎝、厚さ1.4㎝を測る。円刃の短冊形を呈する。刃部は鋭利であり、基部とは抉りにより区分している。砂岩製である。　2．打製石斧。長さ13.2㎝、幅7.1㎝、厚さ2.0㎝の円刃の撥形である。刃部は鋭利であり、基部とは抉りにより区分される。砂岩製である。

3．横刃形石器。基部が欠損し現長は8.0㎝、幅3.8㎝、厚さ0.8㎝を測る。刃部は、表面が一次加工による平坦な面をそのまま生かし、裏面は二次加工により、鋭利に仕上げている。背は、刃つぶし加工を行っている。粘板岩製である。



第31図　グリッド出土土器（1：2）

グリッド出土土器（第31図）

グリッド出土の土器は総数23点である。そのうち、住居跡と同時期の薄手の無繊維土器及び繊維土器が14点、その他の時期の縄文土器が9点である。

1．やや厚手であるが無繊維土器で、胎土に花崗岩粒子を含む。焼成良好で、淡茶褐色を呈する。外面に縦方向の調整を行う。　2．無繊維土器で、胎土に花崗岩粒子を含む。焼成良好で、赤茶褐色を呈する。外面に縦方向の調整を行う。　3．無繊維土器で、胎土に花崗岩粒子を含む。焼成良好で、赤茶褐色を呈する。外面には縦方向の調整を行い、内面には指頭痕が見える。　4．繊維を含む土器片で、焼成は良好、淡茶褐色を呈する。内面は横方向の調整を行い、外面には斜め方向の沈刻を施文している。

5．底部及び胴部下半。薄手で胎土はよく精選されている。焼成は良好・堅緻で、淡褐色を呈する。胴部は内外面ともよく磨かれており、底部は網代底である。　6．口縁部。胎土はよく精選され、焼成は良好・堅緻で、赤茶褐色を呈する。口縁端・内面はよく磨かれている。外面は二条の幅広い沈線を横に巡らし、その下に縦方向の条線を施文する。

Ⅳ　考　察

1．住 居 跡

今回の調査で発掘された3軒の住居跡は、いずれも縄文時代早期末から前期初頭と考えられる。これらは、5～6mの間隔でほぼ隣接して構築され、以下のような共通した特徴をもっている。

1．平面形は、直線的な部分をもつ不正円形で、規模も4.4～4.6m×4.2～4.4mと類似している。

2．柱穴は、4本柱である。柱間寸法は、一辺が1.8～2.1mのほぼ正方形ないし長方形に配置している。柱穴の規模は、直径25～30cm、深さ30～50cm程度とややばらつきがある。

3．炉跡は、住居のほぼ中央にあり、直径60～80cmのやや楕円形の範囲をわずかに掘り凹めた地床炉である。

4．壁は、地形の傾斜との関係で、地山面からの深さが15～50cmとばらつきが大きいものの、立ち上がりは、いずれも垂直に近い。

このように、3軒の住居跡は構築時の基本プランが極めて類似していることから、同時期の所産と判断される。

また、屋内施設では、第1号住居跡の地床炉北東側の床面直上に、偏平な河原石を配し、調理台や工作台として使用したことが考えられ、遺物もこの周辺より集中出土している①。各住居跡の出土遺物については、土器片の他に石器があり、その特徴的なものとして黒曜石製の石鏃や石匙などの成品に加え、未成品及び素材となる原石、加工に伴う砕片等がかなりの量出土している点が注目される②。さらに、磨石や凹・磨石の出土量も多く、表面や裏面のほか側辺にも顕著な磨り面を作っていることも③、食料生産との関係から注目していく必要があろう。

なお、周溝の検出された住居跡は1軒もなく、この時期には一般的でないようである④。

2．土 器

各住居跡から出土した土器は、いずれも床面直上からの出土品であり、第1号住居跡をピット3が切り込んでいるほかは、近年の耕作による攪乱が第3号住居跡に及んでいる程度で、覆土中に明瞭に他時期の所産と考えられる土器片の混入はないため、出土土器は各住居跡に帰属するものと考えられる。

これら土器は、その特徴から第1類――繊維を含まない薄手の土器、第2類――繊維を含まないやや厚手の土器、第3類――繊維を含む土器の3分類することができる。

第1類土器

繊維を含まない器厚5㎜以下の薄手の土器である。⑤

器形は、口縁部が端部まで直線的に開くものと、外反するものがあり、内傾するものはほとんどない（第9図－2～4、第14図－3・4、第19図－4～7等）。頸部はややくびれがあり、胴部に膨らみをつける（第9図－7・9、第14図－8・9、第19図－7・10、第20図－2等）。底部は出土していない。

成形・調整では、指おさえ調整を行った後、外面口縁部上半に横方向、口縁部下半から胴部にかけては縦方向の丁寧なナデ調整⑥を行い、器面をなめらかにしている。内面は指おさえ痕をそのまま残すものと、さらに横方向のナデ調整を行うものとがある。なお、口縁部の内外面に磨き調整を行い、ナデを消しているもの（第9図－3）も見られる。

文様は、口縁端部に連続刻み目を施すもの（第9図－2、第19図－4・5）、口縁部から頸部にかけて平行細線格子文⑦（第19図－7・10）、斜行細線文⑧（第14図－9）、平行沈線文（第14図－11）、格子文⑨（第9図－13）を施文するものもあるが、量的には少なく、大半が無文土器である。

このように、第1類土器は文様・施文具に若干の差はあるものの、文様は口縁部に限られ、器形や器面調整にも共通性が認められる。また、胎土には花崗岩粒を均一に混ぜ緻密であり、焼成も良好でよくしまっている。

第2類土器

量的には少ないが、第1類土器より厚手の器厚5㎜以上の繊維を含まない土器である。

器形は、口縁部がゆるく外反するか、直線的に開き、端部を指おさえによりやや薄手に成形している⑩（第9図－1、第14図－2・5・6、第19図－1・2）。頸部はわずかにくびれ、胴部に若干の膨らみをもつ（第9図－5、第14図－7、第19図－12）。胴部下半から底部にかけては出土品がないため不明である。⑪

器面の調整では、内外面とも口縁部に横方向のナデ調整を行っているもの（第14図－7）を除けば、いずれも粗雑であり、輪積痕もよく残っている。指おさえ痕は内外面とも見られるが、内面が顕著である。ナデ調整はまばらに行うものと全く行わないものとがある。

文様は、口縁端部に連続した刻み目をもつもの（第14図－5）を除けば、いずれも無文である。

胎土は、花崗岩粒を含むが、第1類土器と異なり粒子が比較的大粒で、均一ではない。また、調整が粗雑のため、器面がザラついている。

このように、第2類土器は、第1類土器に比べてかなりの厚みのある、胎土・成形等の異なる繊維を含まない無文土器である。

第3類土器

繊維を含む土器で、出土土器の6割を占める。そのうち、器厚が5～7㎜で繊維を多量に含むもの（第9図－15・16、第10図－1・2等）と器厚が10㎜前後で繊維を少量含むもの（第9図－1、第10図－3等）とに細分類できそうであるが、繊維の量にばらつきがあり断言できな

いため、ここでは一括して扱うこととする。なお、図にあげたもの以外の大多数は無文土器である。

器形は、口縁部がわずかに外反ないしは内傾するものもあるが、ほとんどは直線的に開く。端部は内外面からの調整により、ゆるやかな稜をもつ。頸部わずかにくびれ、胴部が若干膨らみ、胴部下端に丸みをもつ平底土器（第10図－２）と胴部に膨らみをもたず、尖底ないしはそれに近い形状を呈すると推定されるもの（第10図－３）がある。前者は薄手の繊維土器、後者は厚手の繊維土器である。

器面の調整は、指おさえ後、ナデ調整を行っているようであるが、粗雑で判然としない。なお、内外面とも斜方向に条痕を施したもの（第14図－12）がある。

文様は、口縁部に格子文（第９図－16）、平行格子文（第14図－11）、斜行沈線文（第14図－14、第19図－13）、沈線による曲線文（第14図－13）、背圧痕状の文様（第９図－15）とバラエティーに富んでいる。

このように、第３類土器は特徴的文様に欠け、その大半が無文の繊維土器である。

以上のように、住居跡出土の土器の特徴について述べたが、さらにその年代について検討を加えてみる。

第２類土器は、注10で述べたように、長野県田村原遺跡出土の土器群のなかの一群とその特徴が極めて類似していることから、両者はほぼ同時期とみて差し支えないものと考える。また、田村原遺跡では、上述した土器群と共伴して木島Ⅰ式土器に比定される土器群が出土している。本住居跡出土の土器では、第１類土器がそれに替わる土器群とみることができよう。

また、第３類土器は、神奈川県菊名貝塚出土の土器群⑫のなかの繊維を含む無文土器⑬と共通した特徴をもっている。しかし、この無文土器が本来的に注12で述べた条痕文土器群に伴うものか、羽状縄文土器群に伴うものかは断言できない⑭。

さらに、菊名貝塚では、上述した土器群に伴って木島式土器が出土しているが、無文土器同様に注12で述べたいずれの土器群に伴うものか明らかではない⑮。

なお、本住居跡群出土の土器のなかに、羽状縄文等の縄文を施文したものが１点もない点についても注意する必要があろう。

このように、各遺跡の出土土器の共通点から推測して、板橋遺跡における本住居跡群の年代は、縄文時代早期末から前期初頭に位置づけられる。

註

① 屋内施設と遺物の出土状況については、長野県田村原遺跡（酒井ほか：1974）の縄文早期末の住居跡でも同様の傾向が見られる。

② 新津健氏は、白州町誌のなかで、板橋遺跡で黒曜石片が多量に採集されることに注目し、石器の加工場の可能性を推定している（新津：1986）。

③ 神奈川県菊名貝塚（鈴木ほか：1977）からも同様の磨石が出土している。

④　山梨県釈迦堂遺跡（小野ほか：1986）の早期神ノ木台式期の住居跡で、周溝の検出例は全くない。田村原遺跡（前掲）の住居跡では、5軒のうち1軒に部分的ながらも周溝が認められる。また、長野県阿久遺跡（笹沢ほか：1982）の前期前半の30軒の住居跡では、そのほとんどに周溝が見られる。

⑤　木島Ⅰ式土器に見られる波状口縁の頂部より粘土紐を懸垂付着させるものは、1点も見られない。

⑥　ナデ調整は、そのほとんどが刷毛状工具か繊維束により行われたものと推定される。

⑦・⑧　竹管状工具により施文されたものと考える。

⑨　条痕状の沈線による格子文である。

⑩　第2類土器は、田村原遺跡（前掲）で第Ⅱ類土器に分類された土器群と、口縁端部を薄くする点など、器形・成形等極めて類似した特徴をもつ。

⑪　田村原遺跡（前掲）では、丸底状を呈するものと推定している。

⑫　菊名貝塚（前掲）では、層位を明確に把握できない点があり、共伴関係の有無については不明であるが、早期後半の茅山上層式の延長線上に位置づけられる条痕文土器群と前期初頭の花積下層式に位置づけられる羽状縄文土器群が主体となっている。

⑬　第3類土器は、菊名貝塚（前掲）で第4群土器として分類された土器群と、特徴が類似している。

⑭・⑮　菊名貝塚では、繊維を含む無文土器、木島式土器とも、条痕文土器群及び羽状縄文土器群の両方に伴ったものと考えており、若干の年代幅を考慮しているものと見られる。

参　考　文　献

◦鈴木保彦・小宮孟　1977　「菊名貝塚出土の文化遺物と自然遺物」『神奈川考古』第2号　神奈川考古同人会

◦酒井幸則ほか　1974　『田村原遺跡』　豊丘村教育委員会

◦笹沢浩ほか　1982　「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 ―原村その5― 』　長野県教育委員会

◦小野正文ほか　1986　「釈迦堂Ⅰ」『山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　山梨県教育委員会

◦増子康眞　1975　「東海地方縄文文化研究の現状」『東海先史文化の諸段階』　紅村弘

◦吉田格　1973　『関東の石器時代』　雄山閣

◦安孫子昭二　1978　「縄文式土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ(1)』　有斐閣

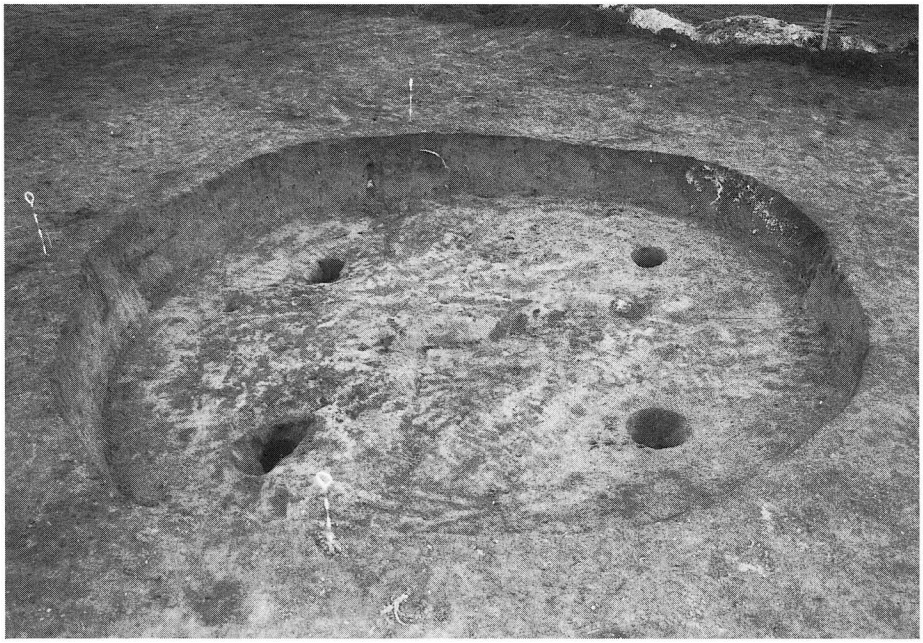
◦新津健　1986　「考古」『白州町誌』　白州町

◦折井敦　1989　『教来石民部館跡』　白州町教育委員会

図　　版

調査区全景

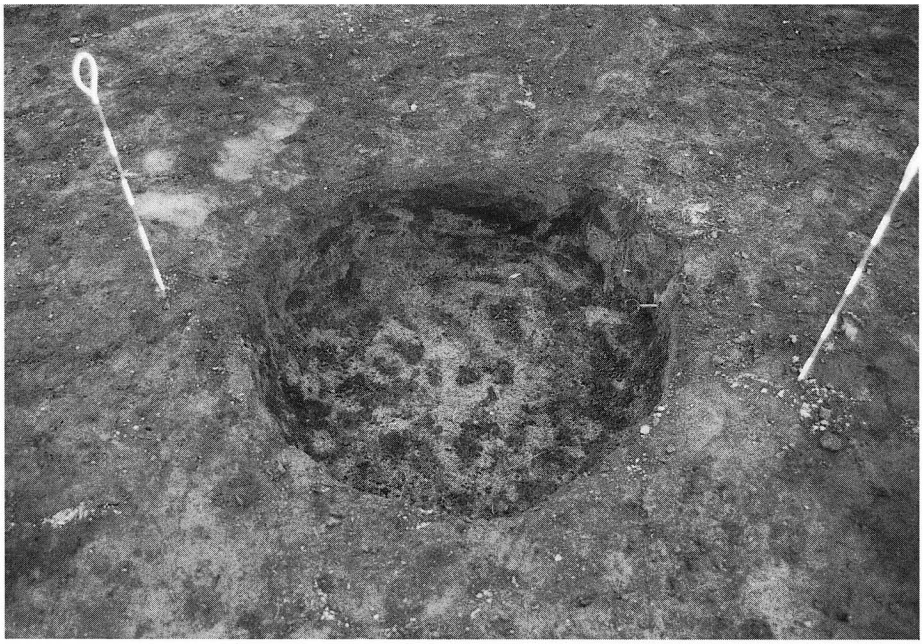
第１号住居跡



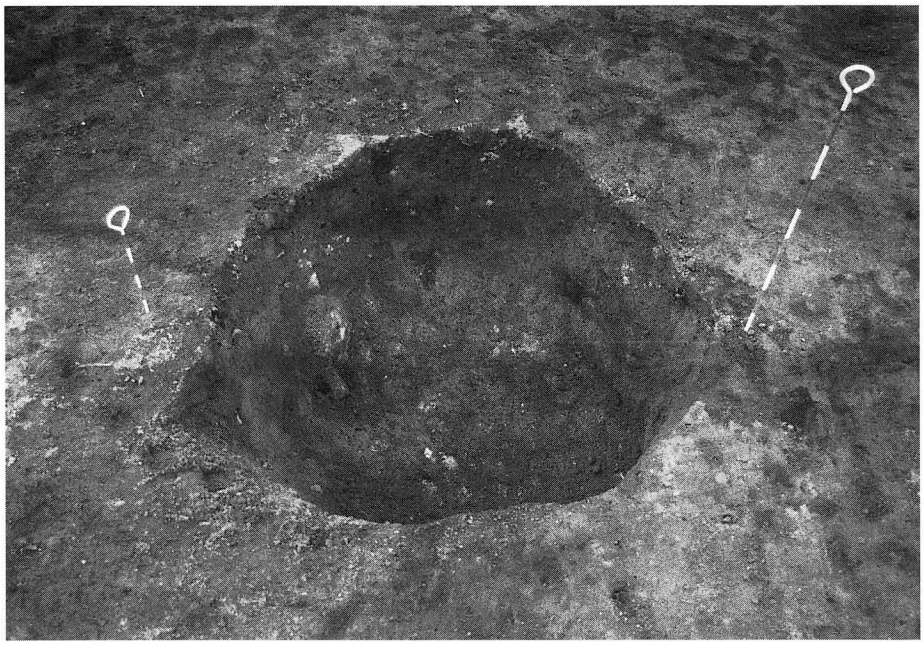
第2号住居跡

第3号住居跡

ピット1



ピット2

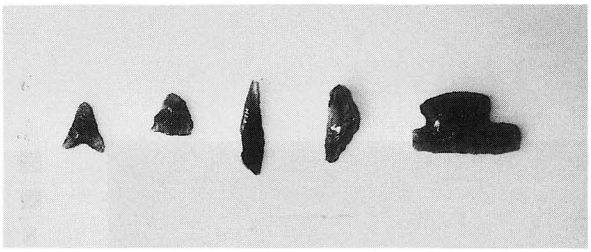


ピット4

ピット5～8

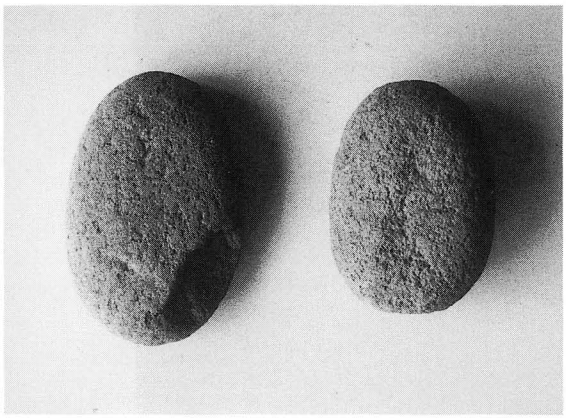
ピット9

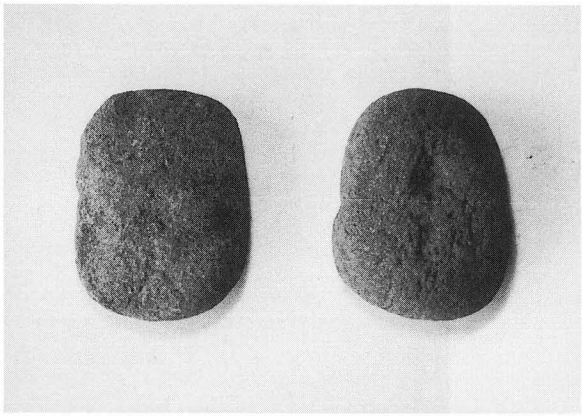
1号配石

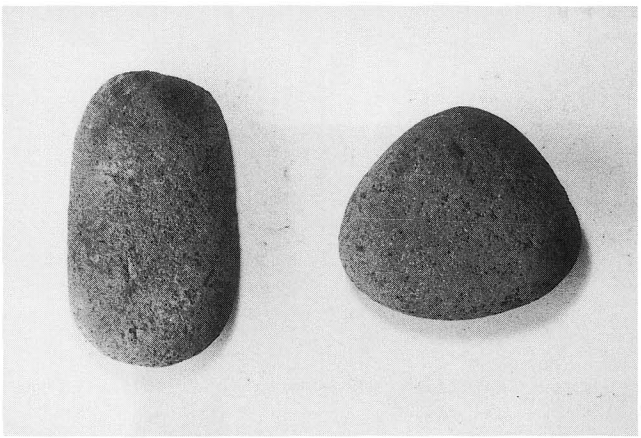


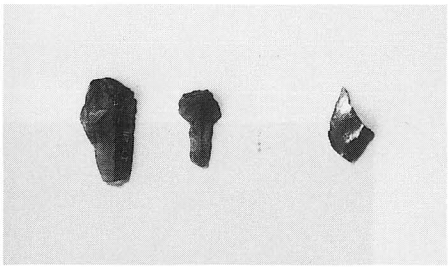
左　1号住出土黒曜石製石器
下・左下　1号住出土磨石

図版6

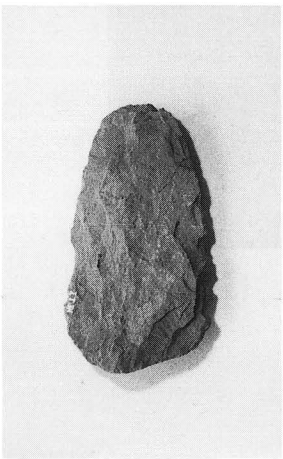


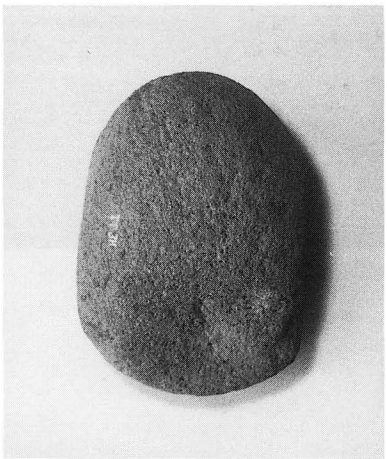


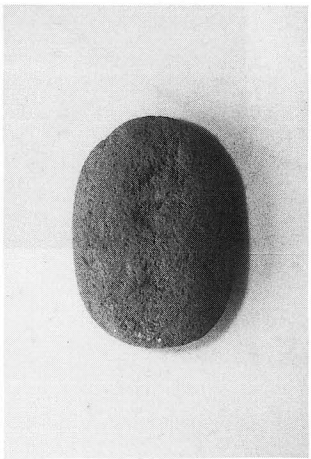




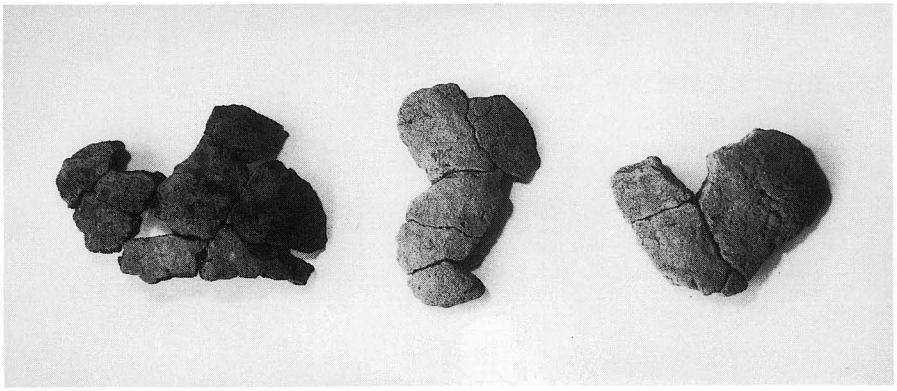
上　2：3号住出土黒曜石製石器
左　2号住出土磨石
左下　3号住出土打石斧未成品
下　3号住出土磨石

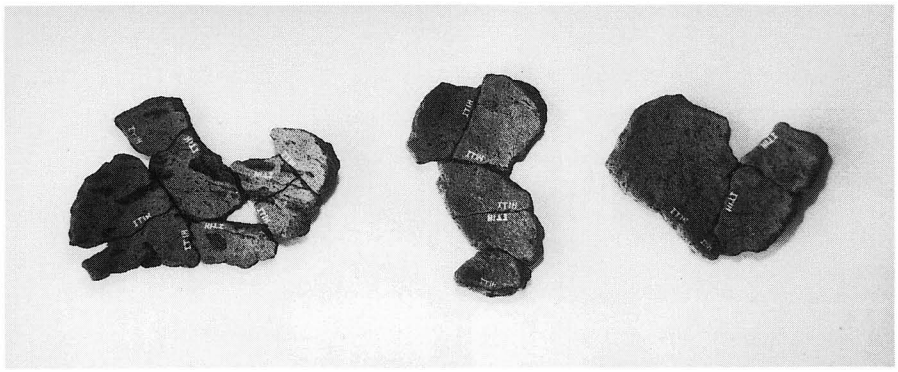






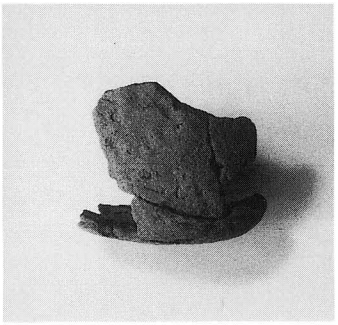
第１号住居跡出土土器　（上　表面・下　内面）

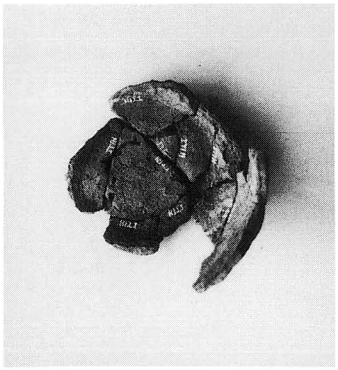




上　第１号住居跡出土土器

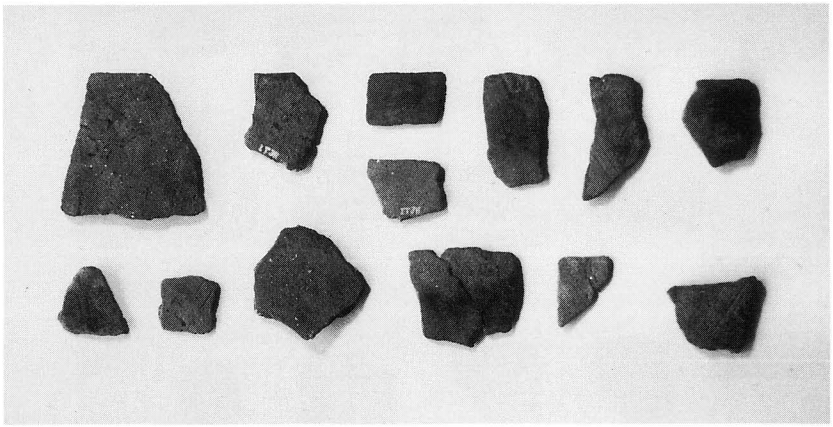
（上　表面・下　内面）

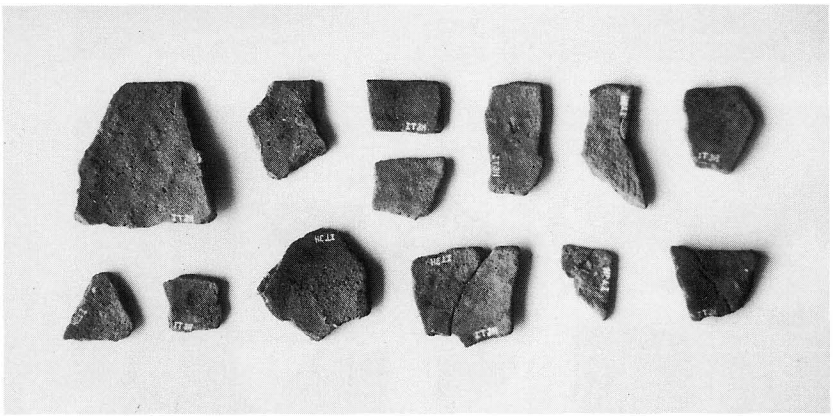




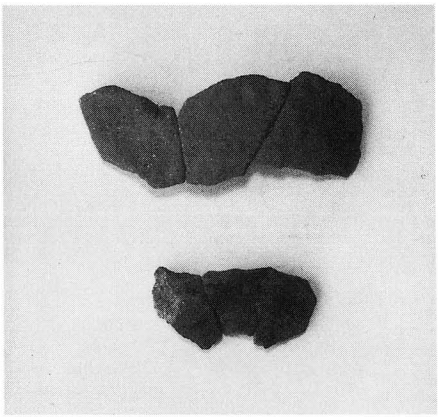
左　第１号住居跡出土土器

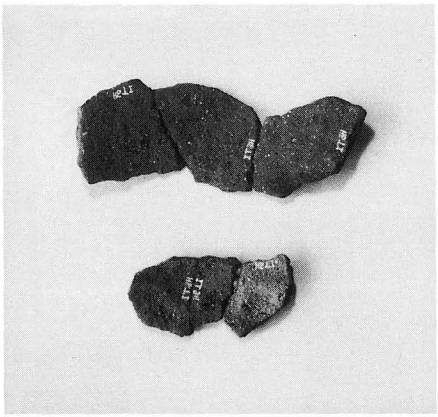
（上　表面・下　内面）



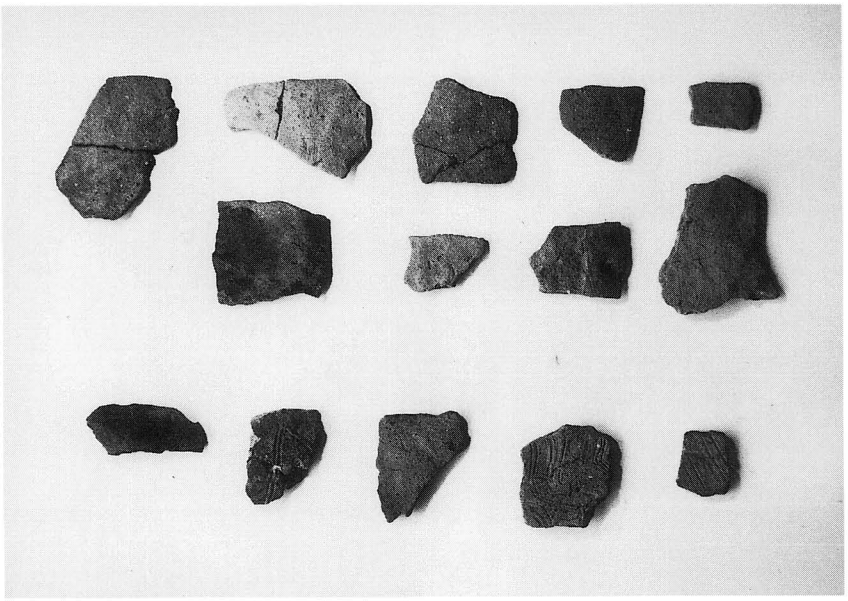


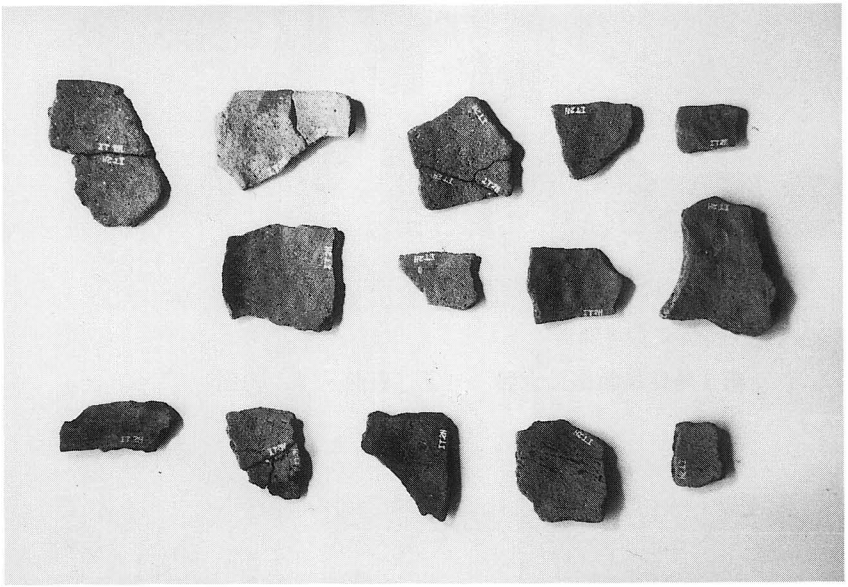
第３号住居跡出土土器　（上　表面・下　内面）



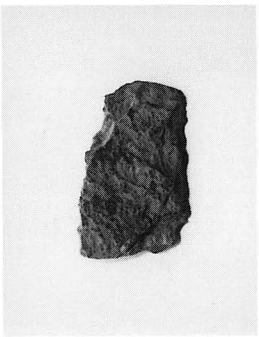


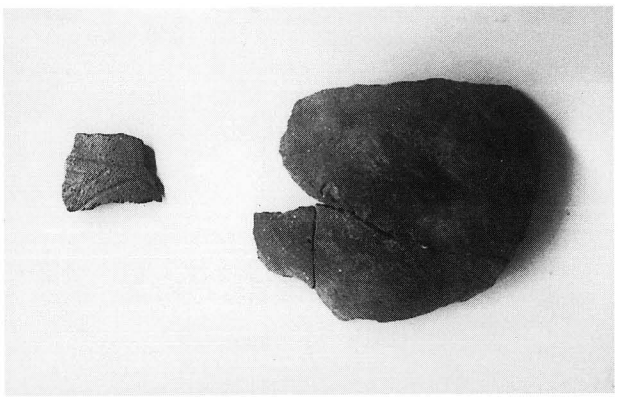
第３号住居跡出土土器　（上　表面・下　内面）





第２号住居跡出土土器　（上　表面・下　内面）





ピット４出土遺物　（左　打石斧・右　土器）

工場増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

板　橋　遺　跡

印刷　平成元年12月20日
発行　平成元年12月28日

発行　白州町教育委員会
印刷　㈲ヨネヤ印刷